
悪魔と呼ばれた少女

ちやこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔と呼ばれた少女

【Nコード】

N0059V

【作者名】

ちやこ

【あらすじ】

高校生になったばかりの谷山麻衣はなぜか、廃ビルに住む変わった少女だった。

そんなある日。学校の旧校舎でカメラを発見した麻衣は、不思議に思い、近付いてみた。

そこで、思わぬアクシデントに遭い、麻衣は思わず超能力を使ってしまった。

ネタバレ考慮なし。後半は、話が全然変わります。

超能力を持つ女子高生（前書き）

「ナルとジーンの状況が逆だったら」に内容が似ています。

向こうの麻衣さんよりも、多機能です。

テレポート、念力発火ができますが、生まれ変わり話であることをご考慮下さい。

超能力を持つ女子高生

三歳の時に父に連れられてイギリスにあったのある施設に行った。機械がたくさんあって、何をされているのか分からなかった。

だけどその後、父は怒るようにして、娘である自分を連れて日本に帰った。

「――夢か」

麻衣は大きく背伸びをした。

この年の春、高校に入学したばかりの谷山麻衣は、少し変わった少女だった。

「高い塔も一つ飛び！」

廃ビルから麻衣は飛び降りた。ここが彼女の現在のねぐらだった。「着地成功！」

クラスの友達も、学校の人間も、麻衣がここで暮らしていることは誰一人知らなかった。高校に入って、バイトをしたかったけど、保証人の問題でなかなかバイト先を見つけることができずにいた。

「どっかにいいバイト先ないかな」

「どうした麻衣？」

「それよか、今日の怪談どこでやる？」

「視聴覚室なんていいんじゃない」

「いいね。麻衣もやるでしょ？」

「そうだね」

（何かあったら困るしね）

高校で知り合ったクラスメイトと一緒に怪談をしていると、突然、変な男が現れた。渋谷と名乗るやたらと美形な男の笑顔に、麻衣は胡散臭さを感じた。

（あの男、転校生なんかじゃない。……じゃあ、何者なんだろう）

麻衣は途中で友達と別れて、視聴覚室に戻った。そこにはすでに男はいなかった。

麻衣は、男がこの視聴覚室を歩き回っている姿をサイコメトリした。それはあたかも、自分と同じサイコメトリの能力者の行動に似ていると思った。

「何、してたんだろ？」

翌朝。男の存在が気になって、麻衣は少し早めに学校に来た。

「転校生じゃないなら、一番知ってるのは校長先生なんだけどなあ……」

奨学金で通っているとは言え、おいそれと校長と会えるほど親しいわけではなかった。

そんなことを考えていると、旧校舎の方に出てしまった。

「あれ？ あんな所に……」

ドアノブを握ると、ドアはいとも簡単に開いた。

「あー、やっぱりカメラだ。何で、こんな所に」

麻衣がそんなことを考えていた時、突然、後ろから低い声が聞こえた。

「——誰だ！」

「わっ！ ごめんなさい！」

後ろの下駄箱にぶつかって、カメラと下駄箱に押しつぶされそうになった。だけど、麻衣も男も押しつぶされることはなかった。

「……これは一体……」

下駄箱とカメラが宙に浮いている。

「あなたがやってるんですか？」

片目で長身の男が、麻衣の肩を掴んだ。

「リン！ どうした？」

昨日の男の声を聞いて、麻衣は音を立てないように下駄箱とカメラを戻した。

「……昨日会った子だな？ ここで何をしてた？」

「カメラがあったから、見てただけ。ところでこの人、あなたの知り合い？ 肩、掴まれて痛いんだけど」

男はようやく状況を判断したらしい。

「リン」

リンと呼ばれた長身の男は、麻衣を離した。

「授業に遅れちゃうから」

逃げるようにして麻衣は去った。麻衣が去った後、二人は生徒手帳が落ちていたのを見つけた。

「彼女のだな。……谷山麻衣。高校一年生か……。ところでリン、お前に幼女趣味があるとは思わなかったが」

「違います！　彼女は、サイキックだと思います」

リンは先ほどの現象を話した。

「下駄箱やカメラを宙に浮かせた？　霊現象ではなくてか？」

「カメラを解析してみれば分かるかもしれません」

「なら、僕はとりあえず、生徒手帳を理由に彼女にもう一度会ってみよう」

放課後。

「谷山さん。いるかな？」

「何ですか？」

「ちょっといいかな？」

麻衣は、靈感少女を名乗るクラスメイトの一人と何か話している最中だった。男はそれを軽くあしらって、麻衣を廊下に連れ出した。

「先にこれを返しておく」

生徒手帳を渡されて、初めて落としたことに気付いた。

「リンから聞いたんだが、下駄箱とカメラを宙に浮かせたのは君だね？」

「あれは、あの人が驚かせなければ」

「君がカメラに触ろうとしていたから、止めに入っただ」

麻衣が逃げようとしたので、男は咄嗟に麻衣の腕を掴んだ。だがその時、ナルはありえない現象を体験した。

「離して下さい。デイヴィス博士」

「な……」

「あ、やっぱり、あなたの名前なんだ」

「僕を知ってるのか？」

「全然。でも、あなたがサイコメトリストだったのは知ってる。昨日、あたし達が帰った後、視聴覚室をサイコメトリしてたでしょ」

「君も能力者か？」

「まあ、そうだね。分かったならいいでしょ。じゃあ、さよなら」
麻衣が立ち去ろうとしたので、男は無理やり麻衣を引っ張って行った。

「ちょっと、離してよ！ デイヴィス博士！」

「ナルと呼べ」

「ナル？」

「僕の愛称だ。ここで博士と呼ぶな」

旧校舎まで連れて来られると、リンがすでにいた。

「ナル。連れて来れたんですか？」

「リン。解析は終わったか？」

「はい。しっかりと映っていました」

「……映ってたって何が？」

「昨日の出来事だ」

「あ！」

麻衣は慌てた。今まで映像に残らないように気を付けていたのに、も拘らず、会ってすぐにこんな得体の知れない人間に撮られてしまうなんて大失態だった。

「君は何者だ？」

「サイコメトリストならサイコメトリーすればいいじゃない」

サイコメトリーと言う言葉を聞いて、リンがナルを見た。

「見られるのは嫌じゃないのか？」

「能力者が普通じゃないのは、あなたが一番よく知ってるんじゃないの？ まあ、殺されたことはないから、死に至る苦痛を味合うことはないと思うけどね」

麻衣の不気味な笑いに、ナルとリンは冷や汗が出た。だが、それでもナルは麻衣に触れた。だが、麻衣は余裕綽々だった。

「ナル。どうですか？」

「……ガードしてるな」

「当たり前じゃん。サイコメトリできるってことは、ガードする方法も知ってるってこと」

「……谷山さんは奨学生だそうですね。だったら、僕の所でバイトしないか？ バイト先を探していると聞いたが」

麻衣はナルの言葉に魅力を感じた。

「……代わりにあたしの能力を調べたいって言うんでしょ？」

「まあ、そうだな。ただ、君の能力は僕よりも上かも知れない。僕はある目的があって日本に来た。それに協力してもらえないだろうか？」

「ナル、それは……」

「いいよ。バイトしていると友達との付き合いを断るのに楽だしね。」

……ただ、代わりに頼みがあるんだけど」

「何だ？」

「バイト代、前借させてもらえないかな？ 春って色々と入用でさ」

「……今回の調査が終わったら、払ってやる」

次の日、校長は四人も霊能者を呼んでいた。一人は高野山の元坊主の滝川。自称巫女の綾子。エクソシストのジョン。霊媒師の真砂子。

地盤沈下だと調べたにも拘らず、旧校舎の崩壊は止まらなかった。

「原さんの霊視でも霊はいないと言うし、一体ここには何がいるんだ」

「……彼女、そんなに有名なんだ」

「メディアでも有名な霊媒師だと思うが」

「あたし、テレビ見たことないもん。友達との会話で情報収集してるし」

「……麻衣は、霊視はできるか？」

「真砂子がいるでしょ」

「原さんがいないと言っているのに、心霊現象に似た現象が起きる

から聞いているんだ」

「……はつきり言うといけない。あれは、人為的なものだよ」

「そこまで分かるのか？」

ナルは麻衣の言葉に驚いた。

「ナルは分からないんだ。……黒田さんを調べてみればいいよ。彼女が一番怪しいもん」

「知らなければ、麻衣も怪しいんだがな」

「ナル。例の実験をするんですか？」

「実験って？　催眠術みたいなやつ？」

「……まあ、そうだな。知ってるなら先に言っておくが、とりあえず掛かったフリをしておいてくれ」

「了解」

「……念を押すが、本当にお前が犯人じゃないんだな？」

「当たり前じゃん。あたしは、平和な学生生活を望んでいるだけだよ」

催眠術実験の結果、黒田さんは潜在的なサイキックであることが判明した。

麻衣の学校の調査が終わって数日後。麻衣は約束通り、今回の調査分のバイト代を先にもらった。

「あーよかった。携帯持ってないと色々面倒だもんね」

魔ビルを訪ねて

麻衣が渋谷サイキック・リサーチでバイトしていて、ふと気が付いたことがあった。

「真砂子ってもしかして、ナルの正体、知ってるんですか？」

「……ええ」

「正体バラすぞって脅されてデートしてるんですね。綾子やぼーさんやジョンなんか、真砂子がナルのパトロンの娘だって思ってますよ」

「そんなことを言ってたんですか？」

「はい。……それにしても、リンさんも随分、あたしと喋ってくれるようになりましたね。もしかして、自分の留守の間にあたしから色々聞き出せて、ナルに言われたんですか？」

麻衣の言葉に、リンが息を飲んだ。どうやら凶星だったらしい。

「……あなたの正体や能力のこともありますが、あなたは一体、どこに住んでいるんですか？ ナルに言われて、谷山さん、あなたの住んでいる場所を訪ねたら、東京どこるか、日本のどこにもそのような住所は存在しませんでした。跡を付けても巻かれてしまう」

「やっぱり、あたしの跡を付けてたのってリンさんだったんですね。バイトに雇ってもらったことは感謝してますけど、あたしが協力するのは、ナルのお兄さんが見つかるまでって約束ですよね」

「そうでしたね」

「でしたら、それ以上のことは詮索しないで下さい。必要以上のことを知ると、災いが起きますよ」

災いと言われて、リンは底知れぬ物を感じた。自分よりも十歳以上も年下の少女に気圧されそうなりんは、恐怖すら感じていた。

麻衣がナルに雇われて一年が過ぎようとした頃、旅行から帰って来たナルに麻衣が言った。

「前から思ってたんだけど、そんなに闇雲に捜して見つかるの？」

「お前だってジーンをサイコメトリして、ジーンが今、どんな状態にあるのか見ただろう」

「そりゃあね。サイコメトリして見てくれて言われたからしただけだから」

「だったら、他に見つける方法があると言っても言うのか？」

「なくもないよ」

麻衣の言葉に、ナルの眉間に皺ができた。

「聞かれなかったし、やれとも言われなかったから」

「何で、僕にそこまで話すんだ？」

「初めて会った頃、ナルの記憶を少し読んだでしょ。あたしと同じ思いを感じたことがあるみたいだから」

麻衣は、自分のカバンに付いていたキーホルダーを外して紐を結わえた。

「何をするつもりだ？」

「ダウジング。ナルがもっと早く見つけられるかと思ったんだけどね。いつまでも監禁されているんじゃ、ナルのお兄さんが可哀想だしね」

麻衣がダウジングすると、ジーンは東海地方にいたことが分かった。

「それで、どこにいるんだ？」

「山奥だね。この辺、細かい地図でもはっきりした建物や村が分かり辛いんだよね。近くまで行かないと分からないと思う」

「なら、お前も来い」

「あたし、学校があるもん」

「幸い、後一ヶ月もすれば春休みだ」

ナルのジーン捜しの旅行に付き合わされる約束をしてしまった麻衣は困っていた。

「あー、何で、あんな余計なこと言っちゃったんだろ」

麻衣はその時、自分の知り合いがちょうど自分を見つけたことに気付いていなかった。

「麻衣じゃねえか」

滝川に気付かず路地を曲がった麻衣は、忽然と姿を消した。そこは行き止まりで、建物の入り口も何もない場所だった。

「だから、俺、見たんだってば！ 麻衣が曲がり角で消えたのを」

「あんたの見間違いでしょ」

「そうですわ。人が消えるなんてありえませんかでしょう」

「ジョンは信じてくれるよな？」

「どうですやろ……」

綾子と真砂子に一刀両断された滝川は、神父のジョンに同意を求めたが、ジョンも滝川を信用していないわけではないが、話の内容を信じ切ることができなかった。

「こんにちは。あれ？ みんな集まってどうしたの？」

イレギュラーが喫茶店代わりにするのはいつものことだが、全員が示し合わせたようにいるのは珍しかった。

「麻衣。ちょうど良かったわ。この破戒僧が、あんたが路地裏で消えたって言い張るのよ」

「路地裏って？」

「昨日、渋谷を夜の九時頃歩いてたらさ、ちょうど麻衣を見掛けたから声を掛けようとしたんだ。そしたら、行き止まりの曲がり角でお前が消えたんだよ」

「……気のせいだよ。人間が消えたんだったら、あたし、ここにいないじゃないじゃん」

「そうよね。ほら、見なさい」

「でも、アレは確かに麻衣だったんだがな」

（フウ。危なかった。気を付けないと）

妙に納得しきれない滝川は、その後、ことある毎に麻衣を疑うようになる。

そして三月の春休み直前の日曜日のことだった。麻衣は一番、見られてはいけない人物に見られてしまったのだ。

いつもより少し早目に渋谷に来たナルは、何気に滝川が話してい

た話を思い出した。

（ここがぼーさんが言っていた、麻衣が消えた路地裏か）

そう思っ、しばらくそこに立って眺めていると、何もなかった空間から麻衣が現れたのだ。

「……ま、麻衣！」

その声に驚いて、麻衣は逃げ出そうとした。

「どう言うことか、お話して下さいますよね？」

がっちりと掴まれて身動き取れなくなった麻衣は、そのまま事務所に連れて行かれた。

「瞬間移動できるとは聞いていないが？ サイコメトリやサイキック、それにテレポート。ダウジングも得意だったな。他にもできるのか？」

「……世間で知られている能力のほとんどは持つてと思う。修行したことがないから、ぼーさんやジョンみたいなことはできないけど」

「つまり、霊視や透視などもできると言うことか？」

「そうです。後は、過去視とか、未来視とか、自然発火現象、ヒーリング、幽体離脱もできるかな」

「能力の安売りみたいだな。それで、わざわざ危険を冒してテレポートで移動するぐらいだ。まともじゃない場所に住んでいることでしょうね。お前の住所は結局不明のままだしな。学校側に聞いても、お前の住所は分からないと言う。いい加減吐け」

「……嫌」

「言えない場所に住んでいるのか？ それとも、僕やリンと同じ理由か？」

「違うよ。孤児なのは本当」

「じゃあ、墓にでも住んでいるのか？」

「ははは。お墓の方がましかもね。死体でも、みんながいるから」

麻衣の言動にのりくらりとかわされ、この日は普通にいつも通り仕事は終了した。

「じゃあ、お疲れ様でした」

ナルは朝の出来事を考慮して、麻衣にある仕掛けを施していた。

「——本当にこんな所にいるのか？」

「反応は確かにここです」

そこは廃ビルだった。ナルは、リンに頼んで麻衣の服に発信機を取り付けていたのだ。

ナルとリンが上がって行くと、そこには寝袋に包まって眠る麻衣がいた。

「……こんな所で寝泊りしているとはな。誰にも住所を知られたくないわけだ」

ナルは溜め息を吐いた。

「麻衣。起きろ」

ナルは、麻衣をゆすって起こした。

「ん」

起こされることなんてあるわけがないと思いますが、麻衣は片目だけ開けた。そこにいるのは、いるはずのない人間。

「夢？ あ、そっか、事務所で寝た夢を見たんだ」

「夢じゃない」

ナルは麻衣の頭を叩いた。

「イッタ」

麻衣はようやく、目の前にいるのがナルとリンであると分かった。

「な、何でここに！」

「お前に発信機を付けた。谷山さんがいつまでもご住所を教えて下さらないので」

「人権侵害だ」

「僕は雇用主として部下の居住を把握しておく必要がありますので……ところで、ずっとここに住んでいるのか？」

「……そうだよ」

「いつから？」

「中学生の時かな。もっと昔にも同じような場所にいたけど、その

頃はさすがに廃ビルじゃなかったけど」

中学生の頃と聞いて、ナルもリンも驚いた。

「とりあえず、私達が泊まっているホテルに移動しましょう。荷物はこれだけですか？」

そこにあるのは学生カバンと大きなスーツケースだけだった。

「そうです。と、言うか、それをどうするつもりですか？」

「移動してもらう」

「何で？」

「バカかお前は。こんな所に住まわせられるわけないだろう」

ナルとリンが泊まっているホテルに無理やり連れて来られた麻衣は、洗いざらいを話す羽目になった。

「……麻衣の両親が亡くなったのはいつだ？」

「父は三歳、母は小学校上がる前に」

「その後、施設に入ったのか？」

「ううん。母の知り合いって人の所にいたんだけど、二年ぐらいで亡くなって、その時、今みたいにバブルで建築途中になったビルに住んできた。冬なんかは廃ビルにいたりしてね。でも、世話してくれ人の息子さんに見つかって連れ戻されたの」

「……その間、学校は？」

「行っていない。でも、盗みはやらなかったよ。ちゃんと働いてお金稼いだんだよ」

「中学生の時から廃ビルにいてと言っていたな。その息子も亡くなったのか？」

「ううん。生きてる。あたしが何度も家出しようとするから、提案を持ちかけられたの。高校まではちゃんと卒業して欲しいって。それと、どこに住んでも構わないから、一年一度は会って欲しいって。だから、あたしも保護者がどうしても必要な時だけ協力して欲しいって頼んだんだよ」

「彼は、麻衣は多重能力者だと知っていたのか？」

「まあね。でも、あの人の話だと、父の方が詳しかったみたい。ぼ

「Iさんがこの前話してたイギリスのSPRの職員だったらいいから」
麻衣のその言葉に、リンとナルは盛大に驚いた顔をした。

「それは、本当ですか？」

「あたしも父が亡くなる前に連れて行かれたことがあるらしいよ。
そう言えば、ナルもデイヴィス博士だったね。ぼーさんが話していた博士と共通点が多いよね……。ごめん。ちょっと眠い。明日は学校だから、もう、寝る」

麻衣はそのまま眠ってしまった。

最初にナルをサイコメトリして以来、麻衣はナルの過去を見ようとしなかった。そのため、ナルがデイヴィス博士と呼ばれる人物であり、ジーンと言う兄がいて、サイコメトリの能力を有していることを知っているのだが、滝川が話したSPRのデイヴィス博士と同一人物であるとは考えもしていなかった。

「リン。イギリスに連絡して、麻衣のことを調べてくれ」

「父親が谷山性でなかったらどうします？」

「……とりあえず、十三、四年前に三歳児の少女の実験が行われていると思う。それについて調べてもらってくれ」

「分かりました」

結局、麻衣はそのままナルとリンが泊まっているホテルに寝泊りさせられている。

「ベッドは気持ちいいけど、慣れちゃうと離れられなくなっちゃうんだよね」

麻衣はそう言いながら、床に寝転び寝袋で寝ようとする。

「何で、寝袋で寝るんだ？」

「熟睡しないためかな。リンさん強いし、ここは結界が張ってあるから熟睡しちゃうそうなんだよね」

「熟睡してはいけない理由があるんですか？」

「それを知りたいんだったら、もうちょっとあたしのことを調べてみたら？ 調べられたら程度までは教えて上げるよ」

麻衣はホテルは居心地がいいのか、無理に出て行こうとはしない。

ただ、それでもナル達が調べ切れたことしか話してはくれなかった。

霊媒師の救出（前書き）

パロディなのでジーンが生きています。

霊媒師の救出

そして春休みに入った。

「おんや、麻衣は休みかい？」

「ええ」

「春休みだから、毎日詰めてんのかと思ったけどな」

ナルと麻衣は二人で、ジーン救出に向かっていた。リンは目立つし、三人ともいなくなるとイレギュラーが不審に思うので事務所の留守番をさせられていた。

「この山中のどこかにいるのは間違いないんだな？」

「……そうんだけど……。この辺って、いわゆる別荘地なんだよね。あんまり警察には係わりたくないんだよね」

「それは僕も同じだ。内装を知らなければ、サイコメトリしても意味がないな。……向こうから連絡が取ればいいんだが」

「……あたし、この辺の別荘を見て来るよ」

「どうやって？」

「幽体離脱。……あたしの体、よろしく」

麻衣はそう言うのと、いきなり麻衣の体が倒れた。ナルはそれを咄嗟に抱き止めた。

霊体になった麻衣は、肝心なことを聞くのを忘れていることに気付いていもいなかった。そう。麻衣はジーンの顔を知らないのだ。

幾つかの別荘は、まだ、春休みに入りたてのためなのか人も疎らで、誰かが監禁されている様子もなかった。

『この辺の別荘じゃないのかな』

そんな風に考えていると、妙に他の別荘から離れた所にある別荘を見つけた。

『何だか、いかにもって感じ』

麻衣はその別荘に入り込んだ。中は他の別荘と変わらない様子だった。だけど一ヶ所だけ、明らかに見張りをしています風の部屋を

発見した。

『何だか、ここにいそうな感じ』

部屋に侵入すると、中の人物と目が合った。

「……君は！」

『な、ナル？』

「ナルを知ってるの？」

『って、それよりもあたしが見えるの？』

「うん。見えるけど。……君、ナルの知り合い？」

『まあね。雇われの身。あなたがジーンだよ。あたし、あなたを助けに来たんだよ。ナルも一緒にいるよ。すぐに助けに来るからちよっと待っててね』

「助けについて、無理だよ。この人達、拳銃とか持ってるし」

『平気平気。拳銃ぐらいじゃ、何ともないし』

「霊体だから？」

『まさか。霊体じゃ、偵察ぐらいしかできません。あーでも、すぐって言ったけど、元いた場所から距離が離れてるから一時間後ぐらいになっちゃうかな。それとね、この後何が起きても大声を出さないでね』

「えっと……。分かった」

ジーンが頷くのを確認すると、麻衣はすぐに自分の体に戻った。

「見つけた！」

「本当か？」

「うん。……って言うか、ナルと同じ顔なんだったら先に教えておいてよ。しかも、霊媒師。まあ、おかげで色々と話はできたけどね」

「それで、どこにいるって？」

「少し離れた所にある大きな別荘。一時間後に助けに行くって約束しておいた」

「一時間後？ どうやって助けるつもりだ？ たった二人で」

「あたしの能力を使えば造作もないことだよ。とりあえず、近くまで行かないと帰りが大変になっちゃう。自分だけだったらともかく、

他の人がいると、あんまり遠くに飛べないしなあ。ま、何とかなるでしょ」

ナルは麻衣の言動に呆れたが、とりあえず、ジーンが監禁されていると言う別荘の近くまで来た。

<ジーン聞こえるか？>

<ナル？ 本当にナルなんだね？ あの女の子が言ってたことって本当だったんだ>

<今、その麻衣が助けに行くそうだ>

<ナルは来てくれないわけ？>

<僕はお前を連れて逃げるように言われている。もしくは囧だな>
<囧って……。ナルは、僕がどうして捕まってたか知ってるんでしよう？>

実は、ジーンはナルと間違えられて監禁されていたのだ。

「連絡済んだ？ じゃあ、行って来ます」

レポートで移動する麻衣を見て、ナルはなるほど思ったが、それ以上に、

（何で僕達が連絡を取り合ったことを知ってるんだ）

と、思ったが、多重能力者だから分かるのだろうと考え直した。

レポートでジーンの目の前に現れた麻衣を見て、ジーンは思わず声を上げそうになった。

「わ！ っぷ」

「大声を出さないでって言ったよね？ 逃げたくないの？」

麻衣の手で口を塞がれ、ジーンは首を横に振った。

「とりあえず、建物の外に出して上げる。外にナルがいるから、見つからないように逃げてね。あたしもすぐに追い付くから」

麻衣はジーンが頷くを確認すると、手を離れた。

「……あの、ありがとう」

「お礼を言うにはまだ早いわ。とりあえず、先に逃げてね」

麻衣はそう言うと、ジーンの背中を押した。押した瞬間、ジーンの体はその場から消え、ナルの立っていた側に現れた。

「あ、あれ？　どうなってるの？」

「ジーンか？　麻衣はどうしたんだ？」

「すぐに追い付くって言われて」

「とりあえず、来い！」

ナルはジーンを連れて走り出した。

「ねえ、彼女何者なの？　ナルに雇われているって言ってたけど」

「バイトだ。お前を捜すために、日本に分室を作ったんだ。そこでバイトをしている」

一方、麻衣は、ジーンが逃げ出したことに気付いた別荘の連中と格闘していた。

「人間ってどうしようもないよね。バカの一つ覚えみたいに拳銃振り回しちゃって」

「貴様！　どこから侵入した！」

「内緒。あなた達に教える義理はありません」

その辺にあった傘を使って、麻衣は銃弾を叩き落した。呆気に取られている男達に近付くと、麻衣は一瞬の内に彼らを動けなくした。「これでよし。明日までこのままでいてもらいましょうか」

朱墨で何やら書くと、そのまま別荘を後にした。

ジーンとナルが向かった方向に向かうと、銃の音を聞きつけたのか、警察が来ていた。

（あれ？　そんなに経ってないはずなのに）

だけど、そこに麻衣はいない人物を見て、逃げ出そうとした。「麻衣！　どうして逃げるんだね？」

側にいたナルは、その人物が麻衣の名を呼ぶことに驚いていた。

「―――先ず、一言謝りたい。デイヴィス博士のお身内を知らぬこととは言え、一年以上も軟禁状態にさせてしまったことを」

「暴力を振るわれたとか、そんなんじゃないかもしれませんから」

「そうか。そう言ってくれるとありがたい」

「リン。ところで、この人物は誰なんだ？」

「日本の警察庁長官の小手川弘明氏です。……谷山さんのことを調

べている内に行き当たりました」

事実上の警察官のトップに君臨する人物である。なぜ、そんな人物が麻衣の知り合いなのか、ナルでも驚いた。

「君が本物のオリヴァー・デイヴィス君だね。初めまして」

「……初めまして。……あなたは、麻衣とどう言ったご関係なんですか？」

「麻衣。話しても構わんかね？」

長官は、ナルではなく麻衣を見た。

「調べられたら話すって約束だから……」

「そうか。――麻衣の母親はいわゆる巫女の家系でね。私の父はその家に仕えていたんだ。戦後も変わらずにね。主家筋と言うことで、彼女の母親のことは子供の頃からよく知っていたよ。彼女が最もありえない男と結婚した時は、父は猛反対してね。しばらく家を離れていたんだが、麻衣の両親が亡くなった後、父は麻衣を引き取ったんだ。でも、わずか二年で亡くなってね――」

その辺のことは、ナルとリンは麻衣から事情を聞いていた。

「ところで、麻衣の父親は、英国心霊調査協会の職員だったと聞きましたが、やはり、そう言った能力を保有していたんですか？」

「まあ、そうだね。彼は霊媒師だったけど、SPRにいたのは彼の母親が有名だったからだよ」

「母親？　つまり、麻衣の祖母ですね」

「ああ。イギリス出身の魔女と言う話さ。眉唾物だけど、麻衣は両親の血統を色濃く受け継いでしまっているんだ。だから、人の側にいられない」

「……おじさんに迷惑掛けたくなかったんだけどなあ」

「しかし、無事でよかったな」

その時、始めて運転手がリンではないことに気付いた。

「あ！　浩君！」

「麻衣。久しぶりだな。元気にしてたか？」

「浩君が運転手してたんだね」

「麻衣のことは、人に知られるわけにはいかんからな。息子を運転手にしたんだ」

浩と呼ばれたのが、どうやら長官の息子であるらしい。

「とにかく、麻衣の能力に関しては、我々の手に負えない部分が多いが、君のような専門家が側にいてくれれば安心できる。不都合なことがあったら、息子にいいなさい。多少のことは回避できるようにとり図ろう」

とりあえずそのまま、東京に戻るようになった。

「……麻衣は、中学の時に家を出たと言っていました、どうやって生活をしてたんですか？」

「お恥ずかしい話だが、麻衣は自分の能力を使って、私のために犯罪者を捕らえていたんです。私は、懸賞金のついた犯罪者のリストを渡し、彼女はその犯人を捕まえて懸賞金を受け取る。一時期、東京では彼女はヒーロー扱いでしたよ。正体を知っているのは、私と息子だけでしたが」

「だから、拳銃を持っている相手でも平気だって言ったんだね」

「麻衣にできないことはほとんどないと言っても過言ではない。まあ、学校に行っていないなかった時期もあるので、勉強の方は平均に行けばいい方かな」

霊能者で、超能力者で、魔法使い。麻衣の能力は計り知れない。

「ところで、ユージン・デイヴィス君だったね。君の場合は、軟禁されていたことを考慮してあるけど、就労ビザではないので、一時、本国に戻る必要があるんだが」

「あ、そっか、そうだよな。せっかくナルと再会できたのに残念だな」

「すまないね。これも規則なんで」

ホテルに到着した後、長官は何度も麻衣のことをナルに頼んでいた。

二日後にはジーンはイギリスに帰国した。ナルからある頼みを受けて。

麻衣は事務所を三日休んだだけで済んだ。

「麻衣。あんた、どこに行ってたのよ？ 春休みだったのに、事務所も休んじゃって。電話にも出ないし」

「ちょっと、用があつて」

「前から思ってたんだけど、あんた、どこに住んでいるのよ。聞いても教えてくれないじゃない」

「内緒。……そんなことよりさ、最近、真砂子が来ないんだけど」

「あら。この前、あんたがいない時に来てたわよ」

「そうなの？ 何だ。残念」

麻衣は真砂子がお気に入りだった。自分とは違う育ち、それに、今時の女の子らしい感じが羨ましかった。

ジーンが救出され、イギリスに帰国してから一週間が過ぎ、麻衣は二年生に進級した。

「まーい。ねえ、聞いた？」

「何を？」

「転校生が来るんだって。見た人の話じゃ、すごい美形だって噂だよ」

「ふーん」

「ふーんって、興味ないの？」

「春休みのバイトでちょっと疲れてるんだ。HRが始まるまで寝る」
だが、麻衣はHRが始まってもしきりなかった。

「――麻衣？」

「ちょっと、起きなよ」

「いつも寝てるの？」

「授業中よく寝て怒られてるよね。麻衣が勤劳学生だってみんな知ってるから、先生もあんまり強く言えないんだよね」

「そうなんだ」

自分の耳元でごちゃごちゃと喋るクラスメイトに混じって、聞き慣れた声に似た声を聞いた。麻衣は寝ぼけ半分に、学校にいるはずがないと思い、薄っすらと目を明けた。

「……ナル？ 何で、ここにいるの？」

「あ、起きた。僕、ジーンだよ。ナルの双子のお兄ちゃん」
「は？」

ジーンのその一言で、麻衣は完全に目を覚ました。HRの間、ずっと寝ていた麻衣は帰り際、ジーンから事情を聞いた。

「ナルがあたしとの約束のために事務所を残してくれるのはありがたいけど、ジーンが転校して来た理由は何で？」

「元々日本の学校に興味があったから。それと、どうせバレると思うってナルに言われたんだけど、君の監視かな」

「監視って、あたし、逃げたりしないけど」

「そう意味じゃないよ。君の能力のことはリンやナルに聞いたけど、かなりの能力者なんだよね。そのための監視みたいなものだよ」

「……ま、いいか。どうせ、あたしも頼ってるんだし」

「それと伝言。引越し先が決まったから」

「引越して？」

「いつまでもホテル暮らしってわけにはいかないでしょ。部屋は別だけど、同じマンションだからさ。君の生活の保障をする条件だと思っただけ」

ジーンはそう言いながら、カギを渡した。

「……ジーンもSPRで働くの？」

「そうだね。そうなると思うよ」

「……みんなの驚く顔が楽しみな。……ところでさ、聞きたいことがあるんだけど」

「何？」

「オリヴァー・デイヴィスって、超心理学者の博士なんだよね？」

おじさんは何で、ナルのことをそう呼んだの？」

「……え？」

ジーンは一瞬、わけが分からなかった。てっきり、ナルの正体を知って協力していると思っていたからだ。

麻衣のマンションは、リンの部屋の隣のジーンとナルの部屋のさ

らに隣の部屋だった。

「こんな所に住んでいいの？」

「気に入った？ 大体の物は揃ってるけどね。足りない物があったら言ってね」

「うーん。本格的にちゃんとした場所に住むんだったらやっておこ
うかな。……この辺に文房具屋さんってあったよね？」

「文房具？ あったと思うけど。買い物なら付き合うよ」

「本当？ じゃあ、荷物持ちに付き合ってもらおうかな。食事の買
い物も必要だから」

ジーンは麻衣が何をするのか楽しみで、ついて行くことにした。

「……それにしても監視されてるって嬉しくないけど、リンさんや
ナルじゃなくてよかった」

「どうして？」

「あの二人は頼みごとがしにくいから。逃げようとすると思えば、
能力使うと罵倒するし、自分の能力フル活用して何が悪いんだか。
それに、あの鼻にかけたような高慢な美人度が一番嫌」

「ナルのこと、嫌いななの？」

「感謝と感情は別。仕事や住む場所与えてもらったことは感謝して
るんだけどね。あの性格を知って好きになる人がいたら、マゾだよ」
「なるほどね。……ところで、こんなに大量のロウソクと墨を買っ
てどうするの？」

「結界を張るの。どうせ、監視するって言って見たいんでしょ？」

邪魔しなければいいよ」

「じゃあ、そうさせてもらうかな」

「一晩掛かるけどね」

麻衣の言ったとおり、本当に一晩掛かった。麻衣は、魔術と神道
の結界を二重に張ったのだ。

「完了！ ジーン。起きて」

「……本当に一晩掛かるんだね。僕、まだ眠い……」

「だから、言ったじゃん。借り物の住処って面倒なんだよね。札を

書くのに時間が掛かるし」

「……そんなにお金貯めてどうするの？」

「家を建てるのが夢なの。最強の家を作りたいんだ」

「買うんじゃないかって？」

「うん。……とりあえず、食事、ジーンの分も用意したけど食べるでしょ」

ジーンはこの日以来、頻繁に麻衣の部屋を訪れるようになった。麻衣も、ジーンに対しては打ち解けるようだった。

彼女のお仕事

ある日。

「ナル、いるかしら？」

ナルを訪ねて若い女の人が事務所に来た。

「……留守にしていますけど」

「あら、きつと本屋ね。じゃあ、ジーンかリンいるかしら？」

「リンさんならいますけど、お呼びしますか？」

「お願いできるかしら？」

「はい」

麻衣が資料室の扉を叩こうとした時、リンが出て来た。その後、二人で何か話した後、ようやく気付いたのか、リンがジーンのことを麻衣に尋ねた。

「ところで、ジーンはどうしたんですか？」

「居残りです。勉強熱心な担任に捕まりました」

「そうですか……」

本屋から帰って来たナルは、ちょうど帰り道に出くわしたらしく、ジーンと共に事務所に帰って来た。まどかと言うその女性から依頼を受けたと、麻衣はジーンから聞いた。

その夜。麻衣に電話が掛かってきた。

『——じゃあ、頼んだ』

「了解しました。……あ、でも、バイトの方を優先させてもいいですか？」

『構わないよ。くれぐれも気を付けてくれ』

「はい」

翌日。イレギュラーが全員集められていた。

「——と、言うわけだ。それと、今回の調査から参加する人物を紹介する」

ジーンが現れると、滝川、綾子、ジョン、真砂子は驚いていた。

特にナルの正体を知っていた真砂子の驚きようは半端ではなかった。
「見て分かると思うが、僕の双子の兄だ。現在は、麻衣と同じ学校に通ってる」

「マジかよ」

「そっくりでおますな」

「入れ替わっても分からないですね」

「麻衣と同じ学校って、先輩なの？」

「……ううん。同じクラス」

「「「「はい？」」「」「」」」

「ジーンは同じクラスなんだよ」

「病気だったのか？　それで、一年遅れて……」

「ぼーさん。あたしじゃなくて、本人に聞いて。大丈夫。ナルよりも手強いけど、人当たりはソフトだし、冷徹じゃないから」

ナルのことをそう表現する麻衣に対して、ナル以外の全員が思った。彼女は最強かもしれないと。

そして、洋館の調査が始まった。

「——他に質問は？」

「あ、はい」

「何だ？」

「質問じゃないんだけど、あたし、個人的に頼まれごとがありませんで、時々単独行動取ることになるけど、捜さないでくれないかな」

「何だって？」

「心配しなくても大丈夫だからさ」

「……分かった」

ナルは渋々承知した。ナルの承諾を得ると、麻衣はカメラの設置を始めた。

それから他の霊能者達と降霊会を行っていると、霊達が寄って来た。

「やっぱ、寄って来ちゃったか……」

麻衣が呪文を唱えるのと同時に、滝川が真言を唱えたため霊は散

った。

「真砂子。大丈夫？ 顔色が悪いよ」

「ええ。少し、部屋で休ませていただいてもよろしいですかしら」

「松崎さんも付いて行って下さい」

女性三人の宿泊部屋に來ると、麻衣は真砂子に指輪を渡した。

「何よそれ？」

「魔よけの銀の指輪。邪氣に中てられているみたいだから。真砂子
って、こう言うのに狙われそうだしね」

「邪氣って、あんたにそんなこと分かるの？」

「……麻衣さんは、変わった人ですわね」

「そうね。安原君の高校での行動にも驚いたわ。あんたって、何者
なの？」

「内緒。気付いた人にだけ教えて上げる」

「それって、ナルは知っているわけ？」

「うん。でも、ナルに聞いても教えてもらえないと思うよ」

「あんたが口止めしてるの？」

「ううん。……それよりも、真砂子は本当に気を付けてね。何かあ
ったら、この指輪に向かって三回あたしの名前を呼んで。そしたら、
必ず助けに行くから」

「アタシにはないわけ？」

「綾子よりも真砂子の方が、ここのお化けの好みだと思う」

「それって、若い方が好みってことかしら？」

「まあ、そんなもんなかな」

その日の明け方。麻衣は仮眠中にこっそりと抜け出した。

「鈴木さん」

フラフラと歩いている鈴木さんを見つけて声を掛けた。

「あら？ え……何で、こんな所に」

「正氣に戻りましたか？ あたしがいいって言うまで、そこの部屋
に隠れていて下さい」

「はい……」

麻衣は木刀を取り出した。

「悪霊退治ってのは疲れるんだけど、おじさんの依頼は断れないんだよね」

現れた怨霊を一刀両断に切り伏せた。その後、鈴木さんの記憶を催眠術で消し、彼女の部屋に帰した。

その日の昼。

「麻衣。このカメラはお前が設置したんだっただ。どこに置いてあるんだ？」

「どこって、この建物の中だけだ」

「時々、妙な物が映るんだが」

「……映像、見せてくれる？」

「いいだろう。リン。見せてやれ」

ナルに言われて、映像を切り替えた。

「やっぱ、ここにいるんだね」

「知ってるのか？」

「このお化け屋敷の親玉かな」

「親玉？」

「美山鉦幸氏だよ。悪霊になっちゃったんだよね。あたしは、こいつの退治と悪事を調べることを依頼されたの」

「依頼と言うのは、この前会った警察庁長官からか？」

「そうだよ。南心霊調査会の詐欺も頼まれたんだけど、そっちはナル達が何とかしそうだからほっとくことにした」

「……谷山さん。彼は危険ですよ」

リンも珍しく心配して言った。

「あんな百年ちよっとの小者に負けるあたしではない。ただ、武器の強度が弱いのが難点なんだよね。それとさ、ナルはサイコメトリしない方がいいと思うよ」

「なぜ？」

「ここの幽霊、全員、首を切られて死んでるから」

麻衣の言葉に、リンとナルは顔色を変えた。

「斧で首を切られて、血を一滴残らず抜き取られている」

「まるで、吸血鬼を模しているみたいだな。いや、もしくは串刺し公ヴァド・ツェペシュか、ハンガリーのエルジェベツト・バートリ辺りか」

「よくは分からないけど、そうなんじゃないの」

「僕でもそこまで分からなかったのに、なぜ、麻衣はそこまで分かるんだ？」

「能力と経験の差かな。ただ、動き回る人間を捕まえるのは難しいんだよね。一部を除いて、若い人が多いからその辺の対策も必要だしね」

その後の調査で、二ヶ月前に亡くなった二人の内の一人の遺体が見つかった。

偽デヴィス博士も露見し、調査を打ち切ることにした。だが、撤収作業の途中で真砂子が行方不明になった。

「麻衣が言った通りになった……？」

「どう言うことだ？」

「麻衣は、真砂子が狙われているって言ったのよ。だから、魔除けだって言って、銀の指輪を渡してたわ」

「銀と言えば、キリスト教圏の魔除けの代表格でおますね。せやけど、何で、麻衣さんがそんなもんをお持ちだったんですやろか」

「それよか、真砂子を探さねえと」

「ぼーさん。その麻衣から渡されている物がある」

ナルがそう言いながら、その場にいる全員にメモを見せた。それは、指定した場所に穴を空けて欲しいと言うものだった。メモを見た全員は呆気にとられた。

一方。そのメモを残した麻衣はジーンとまどかに見守られながら幽体離脱をして、真砂子の正確な居場所を捜していた。

『真砂子ー！』

「……麻衣ですの？」

『無事だね。よかった』

「麻衣の言った通りになってしまいましたわね」

『ごめんね。あたし、真砂子を囿にしちゃったね。今から三十数えてて。そしたら、助けに行くから。それと、指輪は絶対に離さないでね』

真砂子はわけが分からないが頷いた。それを見届けてから、麻衣は自分の肉体に戻った。

「真砂子がいたよ」

「本当に？」

「うん。じゃあ、後はよろしく」

麻衣はまどかが側にいることも気付かず慌ててテレポートした。
「消えた！ ジーン！ あの谷山さんって子、消えちゃったわよ！」

「……リンから話聞いたんでしょ？」

「でも、あんなこと簡単にできるなんて……」

「イギリスのSPRに入るのが夢なんだって。それなのに、未だにナルがそのイギリスSPRのデイヴィス博士だって気付いてないんだから驚きだよね」

「……それ、本当に？」

「うん。ナルの本名も知ってるけど、同姓同名だって信じて疑わないみたいなんだよね。僕は今回の調査が初めてだけど、前の調査の時に霊を使った蠱毒の事件があって、その完成しかけた蠱毒を調伏したらしいよ。ぼーさん達が教えてくれた」

まどかは話を聞いて、開いた口が塞がらなかった。

その頃、テレポートで真砂子の前に現れた麻衣は、驚いている真砂子をどうにか落ち着かせていた。

「ど、どこから現れたんですの？ 霊体じゃありませんわね？ じゃあ、あたくしの方が……」

「落ち着いて。真砂子は死んでないし、あたしも今は霊体じゃない。真砂子に頼みがあるんだけど、壁から離れてて。それと、『お願い』って言ったらこのライトを前方に向かって点けてくれる？」

麻衣はそう言いながらペンライトを渡した。どのくらい経ったの

か分からなかったけど、麻衣は木刀を握り直した。その時、妙に生臭い空気が漂ってきた。

「ま、麻衣……」

「大丈夫だよ。ヴラドなんて小者だけど、やったことはきっちり落とし前付けないとね。……真砂子！　お願い！」

麻衣に言われて、真砂子は麻衣の後方から前方に向かってライトを点けた。その時、何かに反射して、自分達のいる方にも光が当たった。真砂子はそれがカメラだと気付くのにしばらく掛かった。

「ありがと」

麻衣はそう言うと、光で目が眩んだヴラドを一突きした。だが、ヴラドが消えると同時に木刀も壊れてしまった。

「あーあ。壊れちゃったか。木刀って弱いんだよね。高いし……。竹光か、竹刀にしようかな……」

「……麻衣。どうなったんですの？」

「あ、ごめんね。もう、大丈夫だから。この先に行くと、出口があるか。ナルに頼んで開けてもらってるけど、開いてるといいんだけど」

「……麻衣さんは何者ですの？　あんな怨霊を木刀の一突きで倒してしまうなんて」

「あたしとしては、真砂子にだったら何でも話したいんだけどね。とりあえず、ここから出ることから考えた方がいいよ。本当は簡単に出してあげたいんだけど、カメラも回収しないといけないから」

カメラと言いながら、麻衣はカメラを持ち上げた。

「やっぱり、あれはカメラだったんですわね。ですけど、なぜ、こんな所に？　これも、麻衣さんが？」

「まあね。退治を頼まれたものの、ヴラドは人が集まったせいで落ち着きなく歩き回るから場所を捉えるのが難しくって。わざと捕まると、木刀持っていけないから。本当にごめんね。恐い思いさせちゃって」

「助けて下さったんですもの。それはもう、よろしいですわ」

「……この先に行くと、出入り口だから。ちゃんと穴を開けてあれば出るよ」

「麻衣さんは行かないんですの？」

「まだ、やることがあるんだ。こっちが本命」

真砂子が先に行ったのを見届けてから、麻衣はデジカメを取り出した。そこには積み重ねられた骸骨の山。携帯で最初撮ろうと思ったのだが、フラッシュの関係で光度が足りなかったのだ。

「これでよし」

麻衣はカメラと一緒にベースにレポートした。麻衣はそのまますっかり、ナル達のことを忘れてしまっていた。カメラを置いた後、他のカメラ回収を手伝おうと回っている最中、穴の側にいる真砂子と綾子を見つけた。

「真砂子！ あれ？ 他のみんなは？」

「麻衣！ あんた、どこに行ってたのよ？」

「どこって、ベースに……。あ！ そっか、ごめん。こっちから出ればよかったんだよね。みんなは中にいるの？」

「ええ」

「呼んで来るから待ってて」

麻衣は、自分を捜しに行った他のメンバーを捜しに行った。一時間ほとして、麻衣はようやく全員を見つけることができた。

「……麻衣。勝手な行動は取るなと言ったはずだが」

「あたしは最初に、単独行動を取ると宣言してるはずですよ」

「みんなに心配を掛けさせておいてか？」

「それは、悪かったよ」

「ところで、閉じられた壁の中にどうやって侵入したんだ？」

「内緒って言いたい所だけど、そろそろ教えてもいいかな。隠すと面倒なんだよね。もうちょっと、楽したいし」

「楽？」

「そう。あたし、多重能力者なんだよね。悪霊狩りが仕事なの」「マジかよ！」

「ほんまどすか！」

「本当なの？」

「……それは、渋谷さん達のようなゴーストハントなんですか？」

「映像は撮ったりしないなあ。中学まではよく頼まれてやってたんだよね。今回は久々にその依頼があったの」

「依頼と言うのはどなたからですか？」

「真砂子は会ったことがあるかも知れないなあ。でも、その人に迷惑だから言わない」

「……ところで、僕の場合は散々調べてからでないと話さなかったのに、何で、こいつらには話したんだ？」

「何？ ナル。妬いてるの？」

「誰がだ！ ジーン。引っ付くな」

「冷たいな」

ジーンが口を尖らせた。

「でも、何でなのさ？」

「なくしたくない物ができたから……」

「仲間か？」

「それもそうだけど。一番の理由は、真砂子かな。あとジーン」

「あたくしですか？」

「ナルじゃなくて、僕？」

ナルは少しショックを受けていた。

「谷山さんはジーンが好きなの？」

「ううん。違いますよ。真砂子は好きだけど、ジーンは協力者として最適なの。あたし、自分の知らない場所にレポートできないから、一度幽体離脱して様子を見に行くんだけど、霊視できない人だと面倒なんだよね。だから、二人がいると楽なの。特に今回はジーンがいたしね」

「真砂子は何ですよ？」

「男のジーンだと入れない場所があるから。それに、真砂子って可愛いんだもん」

一同は麻衣の能力よりも、麻衣の予想外の趣味の方に驚いていた。こうして美山邸の調査は終了したが、数日後、新聞の一面に載るほどの大きな事件と、三面記事に載った小さな事件があった。

「麻衣。これ、見た？」

朝早くに、ジーンが新聞を持って麻衣の部屋を訪れた。

「見るも何も、新聞とってないし」

「それよりも、ここ、人骨の写真。これ、麻衣が撮ったんじゃないの？」

「そうだけど……。ここまで騒がせるとは思わなかったなあ」

「あと、あの南さんが詐欺で捕まったって」

「そっか……」

「……麻衣は、警察の手伝いをしてたんだね」

「うん。それにしても、ナルがぼーさんが話してたオリヴァー・デヴィス博士本人だったのは驚いた」

「僕としては、気付かない麻衣の方がすごいと思うけど。……それよりも、麻衣は男の僕が遊びに来るの嫌じゃない？」

「ジーンは別に気にならないから」

「僕も一応、男だよ。麻衣を押し倒すことぐらいできるし」

ジーンはそう言いながら、麻衣の腕を引っ張った。だけど、麻衣に額を突かれた。

「ジーンよりも、二人きりになりたいのはナルの方……かな」

「……麻衣はナルが好きなの？」

「な、何で、そんなにはつきり言うかな」

麻衣は恥ずかしそうに真っ赤な顔をソファに埋めた。

「だって、同じ顔した僕は平気なのに、ナルはダメってことはそう言うことでしょ。告白しないの？ ナルも麻衣には興味あると思うけど」

「真砂子がナルを好きだから、それはできない」

「女の子同士の譲り合いってこと？」

「まだ、仲良くなってないけど、真砂子とは親友になりたいんだ。」

だから、その前に壊したくないの」

「つまり、僕は麻衣がナルが好きだってことを知られたくないための当て馬ってこと？」

「さすがにそこまでは考えてなかったなあ。まあ、ジーン程度だったら一捻りかな。あ、骨折しても心配しないで。治せるから。病気はちょっと難しいけどね」

「……僕が霊に憑依されて、麻衣を襲うようなことがあっても、骨折はやめて欲しいなあ。せめて、テレポートでどこかに飛ばすとかさあ」

「他人をテレポートさせるには、誰か人のいる所にしか送れないの。飛ばしたら、その人が迷惑じゃん。まあ、悪霊払いぐらいならできるけどね」

「……麻衣って益々不思議だね」

ジーンは麻衣の思わぬ気持ちを知って、どうするか悩んでしまった。

神さまを式神に

ジーンは高校二年生の男子高校生だ。実際の年齢は一学年上なのだが、一年近く軟禁生活を送っていたため学年を下げて高校生活を送っていた。

そんなジーンは今、自分じゃない恋の悩みを抱えていた。

「……ねえ、安原さんはさ、女の子の悩みって聞いたことある？」

「どうしたんですか？ 珍しいですね。ぼくに悩み相談なんて」

「ぼーさんよりも世代の近い安原さんの方がこう言う気持ちは分かるかなって思ってる」

「それで、好きな子が他の人を好きだって聞かされて困っているんですか？」

「近いけど、ちょっと違う。友達の好きな子を好きになっちゃったけど、告白したくないって言うんだ。両想いなのに、友達に遠慮してるんだよね」

ジーンの話をも黙って聞いていた安原は、ある三人の人物に行き着いた。

「……それって、所長と谷山さんと原さんのことですか」

「さすが安原さん。ナルが頼りにするだけあるね。……まあ、ナルの気持ちは僕が薄々気付いているだけだし、本人も興味の段階を出ないけどね。ただ、麻衣は、真砂子ちゃんと親友になりたいから告白はしないんだって言ってた」

「能力は関係なしにですか？」

安原はナルの正体をまだ知らない。滝川、綾子、ジョンも同様である。

「ナルは心霊現象を研究している人間だからね。麻衣に興味があるのはそのせいだし、麻衣も、ナルは自分の能力に興味があるだけだっと思って込んでるんだよ。……三角関係って、周りで見ている分には辛いんだよね。いっそのこと、僕自身が麻衣や真砂子ちゃんを好

きだったら楽なんだけどなあ」

「まあ、こればかりは当事者以外には何ともできませんからね」

季節のは夏になり、能登の方から調査が舞い込んだ。大学生の青年とその姪の二人連れだった。

麻衣は二人を見るなり、総毛立つ物を感じた。

「麻衣。どうした？」

「……死の影が見える」

麻衣の呟きは依頼人には聞こえていなかった。

能登の調査は、とりあえず事務所の人間と滝川、綾子と一緒に行くことになった。

「ジーン。どうだ？」

「美山邸ほどじゃないけど、かなりいるね」

「そうか……。とりあえず、機材を設置しよう」

建物の中にカメラを設置していると、滝川が麻衣に声を掛けてきた。

「……ジーンから聞いたんだが、依頼人が来た時、麻衣は「死の影が見える」って言ってたらしいな。どう言う意味だ？」

「人が死ぬかもしれない。まだ、誰なのか分からないけど」

「麻衣にも分からねえのか？」

「あたし達メンバーも狙われると思う……」

麻衣は少し考えてから、懐から何かを取り出した。それは、木でできた短刀だった。

「ぼーさん。あたし達のメンバーの中で、誰かに何かあったら、これを持たせて」

「何だ、これ？」

「短刀。この間の調査でいつも使っていた木刀が折れちゃって、そこから削った物なんだけど。二本の内の一本。ナル辺りが狙われるんじゃないかなって思ってるんだよね」

「ナルがか？」

「だって、本人、弱いくせにこう言う所にいたがるんだもん。ジーン

ンもリンさんも苦勞してるんだよね」

「だけど、少年にも渡した方がいいじゃねえのか？」

「安原さんは大丈夫。ただ、取り憑かれるとナルの方が危険なんだよね。とにかく、それを持たせてくれればいいから」

滝川はわけが分からなかったが、とりあえず、言われた通りに短刀を持っておくことにした。

だが、到着した日の夜。吉見家のお婿さんが憑依された。リンがどうにか取り押さえることができた。

「あれ？ 麻衣はどうしたの？」

「カメラの設置に行かせてる」

「どこにさ？」

「さあ。ただ、面白い物が撮れるから、何も聞かずに置かせて欲しいと言っていたな。美山邸のようなこともあるし、麻衣にしか入れない場所があるからな」

「それよりも、綾子さんで大丈夫なのかな？」

「明日にはジョンが来る」

だが、綾子が憑依霊を落とした直後、ナルが憑依されてしまったのだ。

「ナル。カメラ設置してきたよ」

大分経ってから麻衣が戻って来た。

「あれ？ みんな集まってどうしたの？」

「……ナルが憑依された。……麻衣が言ってた通りだな」

「それで、短刀の方は？」

「リンが金縛りを掛けて眠らせて、そこに持たせてある」

「谷山さん。あの短刀には何の意味があるんですか？」

「あれは、ナルの力を封じ込めるためなんです。ヴラドが思っていた以上に強くなって壊れちゃいましたけど。それでも、それまで倒した怨霊や悪霊の斬ってきた木刀の破片だからお守りに最適なんですよね」

「話は分かったけど、何で、始めからナルに持たせなかったのよ？」

あんたは始めから知ってたんじゃないの？」

「……夢で憑依されるのを見たけど、ジーンなのか、ナルなのか分からなかったの」

「どちらかに持たせることも考えなかったんですか？」

「あの短剣は、あたし以外が持つと能力を封じちゃうんだよ。あ、能力と言っても潜在的なもので、意識してないと使えないものは別だからね。ぼーさんは超能力者じゃないから渡しても大丈夫だと思っただの」

「……ねえ、ナルはこのままなの？」

ジーンが心配そうに言った。

「データ撮らないで原因を排除していいって言うならやるけど、それだと後でナルに叱られない？」

麻衣の一言でデータを収集することにした。

翌日。ジョンと真砂子がやって来た。

「——まさか、渋谷さんがそんなエライことになってはるとは……」

「……ナルは今、どうしてるんですの？」

「リンさんが金縛り掛けて寝かせているよ」

「……麻衣でも落とせないんですの？」

「ナルは意思が強すぎるんだよね。それに、ちょっと危険だしね」

滝川、綾子、ジョン、安原の四人には、危険の意味がいまいち分からなかった。

「真砂子にあげた銀の指輪。まだ、ちゃんと持ってる？」

「ええ。……ですけど、これに麻衣さんの名前を呼ぶと、どうして麻衣さんに分かるんですの？」

「あたしが子供の頃から身に付けてた物だから、あたしの力がこびり付いているんだよね。真砂子のこと守ってくれるよ」

「……麻衣さんは、どうして、あたくしに親切にしてくれるんですの？」

「……真砂子は忘れちゃってると思うんだけど、あたし、真砂子に

昔会ったことがあるんだよ。もう、何年経ったかな……」

「そうなんですの？」

麻衣はそれ以上何も言わなかった。それ以上話す気がないのか、それとも、今は話すつもりがないのか。

調査は続き、麻衣や綾子の活躍でナルの憑依もどうにか解けた。そして、原因が洞窟内の木像だと分かった。

「木像を壊すの？ わざわざみんなで行かなくても、あたし一人で壊せるけど」

「壊せるのか？」

「あ、でも、木刀じゃ木像は壊せないな。……今から言う物を用意してくれば壊せると思うけど」

「そんなに簡単に用意できる物なのか？ どんなもなんだ？」

「日本刀なんだけど」

「「「「「日本刀！！」「」「」「」」」」

さすがにその言葉には、ナルも含めて、全員が驚いた。

「日本刀使って、木像を壊すのか？」

「無理だったら他のやり方にするけど……。あ、でも……。そうだ。いいこと考えた！」

麻衣は一人納得したように、手を叩いてにやけていた。

「明日までにどうにかしておくから」

「どうにかって、何するつもりなの？」

ジーンの言葉など、麻衣はすでに聞いてもいないようだった。

「麻衣は、何をするつもりなんだろう……」

「来るなって言われると、行きたくなるのが人間なのよね」

「だけどさ、危なくない？」

「一緒に付いて来て、何を今更言ってるんだ。ジーンだって気になってるんだろ」

「それは、そうだなんだけど……」

滝川、綾子、ジーンの三人は、麻衣が何をするのか不思議で、こっそりと見学しに来たのだ。だが、すぐに見つかってしまった。

「三人とも、何、してるの？」

「「わ！」」

「人のこと偵察に来て、驚くことないでしょ」

「な、何で、分かったの？」

「意識がだだ漏れなんだもん。特にジーンは一緒にいる率が高いから思考が掴みやすいんだよね。それで、あたしが何するか見学に来たの？」

黙っていてもどうせバレると思ったのか、三人は頷いた。

「成功するかどうか分からないから、危険だって言ったのに。意外と好奇心旺盛だね」

「まあな。……それよりも、何をするつもりだったんだ？」

「『おこぶ様』をあたしの式神にしようと思って。前々から、欲しかったんだよね」

三人は呆気にとられた。仮にも神様を式神にすると言い出したのだ。そして、何があっても邪魔しないと言う条件で、三人は麻衣のすることを一晩中見学していた。明け方には麻衣は『おこぶ様』を式神にすることに成功していたが、ジーンは自分のしたことを後悔した。

「僕、もう麻衣の仕事を見学するのやめる。……ノイローゼになりそうだ」

「……同感」

「同じく……」

「三人とも一体、何を見たんでしょね」

「……とにかく、木像はどうにかしたんだな？」

「うん。だから、これ以上変なことは起きないよ」

「せやけど、ほんま、今回は麻衣さんと松崎さんが大活躍だったな」「能力のことバラしちゃうと活動しやすいんだよね。とにかく、これから撤収なんだよね。帰る時、あたし、寄りたい所があるから別行動とってもいいかな？」

「……どこに行くつもりだ？」

「ナルには迷惑掛けないから気にしないで」
麻衣の言葉に、ナルの眉間に皺が走った。
「どっちにしろ、東京に戻った次の日は、いつもお休みでしょ。次のバイトの日には間に合うようにするから」

意外な繋がり

能登の事件から別行動を取った麻衣を一人にするほど、ナル達は薄情ではなかった。ただ、付けていることがバレないように付けていた。

尾行と言えば、安原である。ジーンも一緒に行く予定だったのだが、目立つと言うよりも、麻衣に思考がバレやすいと言う問題からだめになった。代わりに一緒にいるのはナルである。

「ところで、谷山さんは一体、どこに向かっていらっしゃるんでしょうね？ 彼女だったら、レポートでひょいって感じですけど」

「恐らく、麻衣が一度も行ったことのない場所なんでしょう」
「なるほど」

麻衣は二人が付いていることに気付いているのかいないのか、普通に切符を買って電車に乗り込んだ。麻衣はそのまま終点まで行った後、さらにバスに乗り込んだ。

ナルと安原は、タクシーを止めてバスを追ってくれるように頼んだ。

「松崎さんですか？ 今、谷山さんを追ってタクシーに乗っています。——ええ。——県にいます」

安原が電話を切り終わると、ナルが話し掛けてきた。

「ぼーさん達はすぐに来れそうですね？」

「回り道することになりそうですね。何せ、電車で三時間。バスもかれこれ一時間は走ってますからね」

安原は何気にタクシーの運転手に聞いてみた。

「運転手さん。この先って何があるんですか？」

「何だ。知らないで、バスを追い駆けるなんて言ったのかい」

「すみません」

「いや、いいんだ。……あるのは古い集落さ。ああ、でも、大地主が住んでるね」

「大地主ですか？」

「俺は、こちらの出身じゃねえから詳しいことは知らんけど、この山一帯の持ち主さ」

そうこうする内にバスが目的地に着いたらしく、麻衣が下りるのを確認してから、少し離れた所でナルと安原もタクシーを降りた。

藪の中を突き進む麻衣は、突然、銃を突きつけられた。

「そこで何をしている？」

「あなた達のボスに用があるのよ」

麻衣は銃を一瞬の内に炎で溶かすと、怯んだ男達の額に何やら描いた。麻衣が去った後、ナルと安原が何をされたのか確認すると、額に口紅で何か模様と数字が描かれていた。

「何でしょうか、これ？ ……今回の調査で、リンさんが渋谷さんの額に書いてあったものと似てますね」

「つまり、金縛りのようなものか……」

「それよりも、追い駆けませんと」

「……安原さん。安原さんはこのまま、先ほどの場所に戻って、ぼーさん達が来るのを待っていてくれませんか？ 僕は麻衣を追い駆けます」

ナルはそう言うのと、安原の返事も聞かずに麻衣が向かった方向に向かった。

その頃、麻衣は。

「あたしを捜すために、よくもまあ、ジーンを一年も監禁したわね」

「ジ、ジーン？」

「あなたが別荘で監禁していたのは、オリヴァー・デイヴィスの双子の兄よ」

「ま、まさか、そんなこと……」

「その証拠に、彼はサイコメトリを拒んだでしょ？ 当然だよ。できるわけないんだから。別荘をサイコメトリしてみても驚いた。あなたが一枚噛んでいるとはね」

「……あ、あなたが悪いんです。母君の方ばかり頼るから」

「そんなこと言ったってねえ。ここは日本だし、あたしも日本人として育った方が楽だったんだもん」

「私が、あなたを捜すのにどれだけ苦労したか……」

「だからって、誘拐することないじゃない」

「それに、国家警察がバックについているせいで、あなたの所在は杳として知れないし」

「身内でも親戚でもない人間に、そんなに簡単に居場所を教える国だと思ってたの？」

「それは……」

「心配しなくても、あたしは十八歳になったら日本を離れる。向こうに行くつもりでいるから、向こうで待っててよ」

麻衣がそう言うと、その人物は頷いた。その時、麻衣は建物に誰かが近付くのに気付いた。窓から外を覗くと、そこにいたのはナルだった。

「ナル！」

ナルの方も、窓から顔を出した麻衣に気付いた。

「誰ですか？」

「本物のデイヴィス博士よ。ナルがここにいてことは、多分、ジーンも近くまで来てるわね。……ちゃんと、事情を説明して謝ってね」

「……分かりました」

外に出て来た麻衣が男と一緒にいるのを見て、ナルの表情が変わった。

「ナルは、あたしを付けて来たのね」

「そうだ」

「ま、本当は気付いてたけどね」

「……その男は誰だ？」

「ジーンの誘拐犯」

「は？ 何だって？」

「麻衣様！」

麻衣様と呼ばれ方に、ナルは益々わけが分からなかった。

「一緒にいるのって誰？ 真砂子やジョンは目立っちゃうよね」

「安原さんが一緒にお前を尾行していた。もうすぐ、ぼーさんと松崎さんとジョンが来るはずだ」

「そっか……。ジョンは当事者だから説明してあげたいところだけど」

麻衣は、男の方に向き直ってから数日以内に東京に来るように言った。

「ですが、よろしいのですか？」

「ナルがこのままみんなに自分の正体を隠し続けたいって言うんだったら、あたし達が住んでいるマンションの方に来てもらうけど」

「いや、事務所の方でいい」

「許可が出たので事務所の方に」

「分かりました」

麻衣はとりあえず、ナルと一緒に参道の入り口まで戻ると、そこには滝川達が待っていた。

車の中で、ナルは麻衣に尋ねた。

「それで、あの人物は何者なんだ？」

「ここって言っちゃうと二度手間なんだけど」

「そんなことは、僕の知ったことではない。お前が勝手な行動を取るから、みんなが心配していた」

「そうよ。あんたが強いことは、今回の調査でよく分かったけど、一人で行動するなんて、何かあったらどうするのよ」

綾子に怒られて、麻衣は少し反省した。

「ところで、本当にここって、麻衣と何か関係があるのか？」

「まあね。ここ、父方の系統の土地なんだよ」

「本当ですか？」

「父方の祖母がイギリス出身の魔女の系統……だって言ったっけ？
まあ、その魔女だったお祖母ちゃんと結婚したのがこの土地の持ち主だった人物なんだよね。まあ、正確には正式に結婚してない

んだけど。お父さんはそのため、イギリスで育ったんだよね。だから、あたしもお父さんが亡くなるまで、イギリスに住んでたんだ」

「それで、麻衣はここに何しに来たの？」

「ちよっと、説教しに。詳しい話は、ナルがわざわざ事務所開く原因作った人物が、渋谷サイキック・リサーチの事務所に来たら話して上げる」

わけが分からないまま、一向は東京に到着し、その一週間後。

「申し訳ございませんでした」

男は先ず、ジーンに平伏した。それから、ナルにも頭を下げた。

「……麻衣。今度こそ、この人物が何者なのか紹介してもらえんだな」

「彼は、ジョージ・カートリー。イギリス人よ。イギリスで魔女の家系だったお祖母ちゃんに仕えていた人物の孫なの。お父さんが亡くなって、あたしはお母さんと一緒に日本に行ってしまった後、ずっと捜していたみたい」

「けど何で、実際は間違いだっただとしてもデイヴィス博士に頼まなくちゃならなかったんだ？ 警察に頼めばある程度は失踪者を捜してもらえるんじゃないのか？」

「……それは無理だろう」

「何ですかの？」

「麻衣を保護していた人物は、警察庁の長官なんだから」

「「「「本当に！」」」」」

「それじゃあ、捜しようがないわね。日本国内では鉄壁の守りだわ」「せやけど、何で、麻衣さんはイギリスを離れられたんですか？」

「それは、麻衣様と母君を利用しようとする輩がいたからです。イギリスの魔女と日本の巫女と言う稀有な能力者とお血筋である麻衣様は、いわゆる研究者にとっては喉から手が出るほど欲しい人材。それに、犯罪者からも。母君の家系にも、何度か国家権力に利用された先祖がいっちゃったようです」

「ですが、谷山さんはイギリスに行くと仰ったんですね？ なぜ、

わざわざイギリスに？ それに、すぐではなく、十八歳なのですか？」

「十八歳ってのは、おじさん……長官のことなんだけど。おじさんと高校までは卒業するって約束したから。それと、あたし、イギリスの戸籍か、日本の戸籍か選ばないといけないんだよね。それにさ、犯罪者にはなりたくないから今のところは庇護者が必要なの。だから、子供頃からイギリスのSPRは憧れだったんだ。能力を研究している機関なんて、世界中にそうそうないしね」

「じゃあ、谷山さんがイギリスに行かれたら、所長達もイギリスに帰ってしまわれるんですか？」

「そこまでは、あたしは関係ない。日本に留まってるのはナルが日本の心霊現象に興味があるからだって、本人言ってたしね。あたしの能力を研究する名目もあるんだろけど、あたしの研究データ、イギリスに保管されてるって聞いてるもん」

「聞いてるって、誰から？」

「森さん。前に来た時にね。それで、ナルの正体を知ったわけなんだけど。三歳だったあたしの能力実験をしたのが、お父さんと、お父さんの友人だったんだけど。その友人って言うのが、ナルとジーンの養父のデイヴィス教授だったの。当時は教授じゃなかったんだろけど」

麻衣の秘密を知るはずだったのにも拘らず、思わぬナルとジーンの正体まで知ることになるとは思ってもいなかった。

ジョージが帰った後、誰に対して何を聞いていいのか分からず混乱していた。

「——とりあえず、ナルがデイヴィス博士本人だってのは分かった。日本に来たのは、双子の兄であるジーンの失踪のせいで、しかも、その理由がナルと間違えられたせいだと言うんだな」

「うん。そうだよ。何度も違うって言ったんだけどね。……まあ、まさか捜させようとして人物が本物であるナルの側にいるとは思わないよね」

「だけど、麻衣はどうして今まで会いに行かなかったのよ。サイコメトリしたって言ってたじゃない」

「纏まった休みと、お金と、時間がなかったから。だから、能登の調査で近くまで来れたのはラッキーだったんだよね。あたしのせいでジーンが誘拐されてたんだから、謝りたかったんだけどね」

「僕はもう気にしてないから。あそこから出してもらえなかった以外は、割りと自由だったしね」

「だけど、間違いとは言え、デイヴィス博士を誘拐して監禁するほど切羽詰ってたんですね」

「……ところで、麻衣は今、どこに住んでんだ」

「どこって、リンさんやナルとジーンと同じマンションの同じフロアの部屋だけど」

「いつから？」

「ジーンを救出した後から。以前は廃ビルに住んでたんだけど、ナルに見つかって、ホテルに一緒に寝泊りしてたんだよね。あたしの携帯に勝手にGPSを組み込んだらしくって、逃げると連れ戻されるもんで逃げるのを諦めたんだけど。だから、寝床の提供を甘んじて受けたの」

「谷山さんは、それでも寝袋で寝ていましたけどね」

「今はさすがに寝袋で寝てません。超強力な結界張りしましたから」

「一晩中掛けてね」

「ジーンは知ってるんですの？」

「ジーンは、あたしが結界張っている様子を一晩中見てたから。クラスが同じせいもあって、しょっちゅう遊びに来てる。逆にあたしはナルとジーンの部屋には行ったことないんだよね」

「前から聞こうと思ってんだけど、麻衣はジーンと付き合ってるわけ？」

「違うよ。……まあ、だからジーンが嫌いってわけじゃないけどね。とりあえず、恋愛関係の話は今は関係と思うけど」

「だって、気になるじゃない」

その後、麻衣は一切、恋愛がらみの質問にだけは答えなかった。

魔女の館

ナルの正体がみんなにバレ、麻衣の秘密が露見してから一年が経過した。

ナル、麻衣、真砂子の三角関係には何の進展も見られず、最近では麻衣自身、すっかりナルに対して諦めムードになりつつあった。

「……麻衣は、ナルが好きなんじゃありませんの？」

「一時期はそうなのかもって思ってたけど……。今は、どうでもよくなっちゃった」

「どうでもいい……ですの？」

「真砂子と親友になれた方が、ずっと嬉しいから」

「そうですの？」

「うん。ナルが日本に残るのか、イギリスに戻るのかは知らないけど、真砂子は告白するなら今の内だよ。それに、真砂子がナルと一緒にになってくれれば、もしかしたらイギリスに来ることもあるんだよね。そしたら、あたしがイギリスに行った後でも会えるのに」

一人、妄想モードに入っている麻衣に、真砂子はちょっと呆れ気味だ。

「麻衣は、本当に気付いていらっしやらないみたいですね」

麻衣がナルにお茶を出している間に、真砂子は安原とジーンに聞こえるように言った。

「あたくしでも、分かるくらいですのに」

「ナルの態度だよね」

「そうですね。あの二人がくっ付いてしまった方があたくし、すつきりしますわ」

「でも、所長もプライド高そうですからね。そう言う状況にならないと無理なんじゃありませんか？」

「麻衣は、ナルと二人きりになるのを異常に恐れてるからね。薄々は気付いているんだろうけど、真砂子ちゃんを傷付けたくないって

言う思いの方が強いんだよね」

「……そう言えば、原さんは谷山さんのお氣に入りでしたね。なぜ、あんなに親友になりたがっていたのか、原さんはお聞きしたんですか？」

「聞きましたわ。……麻衣が子供の頃、お世話になっていた方が亡くなられたと仰っていたでしょう。その後、二年ぐらい行方を眩ましていた時に幽体離脱した状態であたくしに会っていたそうですわ。あたくし、言われるまで、ずっとあれは幽霊なんだと思っていましたわ」

「そんな理由がお在りだったんですね」

「……あの頃のあたくしにとっても、唯一の友達だったんですわ」

真砂子が麻衣との思い出を思い出していたが、とりあえずは、麻衣とナルをどうやってくっ付けるかと言う話になった。

「先ず、二人きりになる状況を作るんです」

「どうやって？」

「そこはまあ、色々ですね。とりあえず、リンさんにも協力してもらいましょう」

それから数日後。

いつものように学校が終わってから麻衣がバイトに来ると、オフイスにナルが座っていた。

「あれ？ ナルが留守番でしてるなんて珍しいね」

「誰もいないからな」

「……誰もいないって、ジーンは先に来てるはずだけど」

「この前の調査で修理に出した機材を取りに、リンと一緒に向かわせた。安原さんは急用で休み」

「リンさんもジーンも、もうちょっと待っててくれれば一緒に手伝ったのに」

「麻衣の能力ならそのぐらい簡単だろうが、他の人間の目がある場所ではバレないとは限らないからな」

「ま、そうだね。ところで、お茶はここで飲むの、所長室で飲むの

？」

「とりあえず、一杯目はここでいい」

「了解。つまり、お替りは所長室に運ぶわけだね」

「よく分かってるじゃないか」

麻衣はナルの向かいに座って、淹れてきた紅茶を一口飲んだ。

「……それにしても二人とも計画がずさんだよね。あたしとナルを二人きりにして、何か進展があると思っているみたい」

「そう言うのを考えたい年頃なんだろう」

「あたしもナルも同世代なんだけどね。……ところでさ、ナルは後どれくらい日本にいるつもりなの？ ナルぐらい優秀なんだったら戻って来いって再三言われてそうだけど」

「まあ、そうだな。ジーンがこちらの高校に入ったこともあるし、ジーンが卒業するまではいるだろう。麻衣もイギリスに行くんだろう？」

「そのつもりでいるよ」

「SPRは簡単に入れる機関ではないが」

「あ、それは平気」

麻衣の言葉に、ナルは怪訝な表情になった。

「ジョージはSPRのスポンサーになったから。三歳の時に検査を受けているし、まどかさんが教えてくれたんだけど、SPR本部もあたしの所在を捜していたんだって」

「それは何か？ つまり、僕が麻衣の存在を隠匿していたとでも言いたいのか？」

「まあ、報告していなかったのは事実だよ。ナルは、自分で見つけた被験者だと思いついてみたんだけど、研究者としてはとにかく、あたし、ナルの庇護対象者にはなれないよ。あたしの方がむしろ、みんなを守れると思う」

「それでは、僕らの立つ瀬がないな」

「ははは。でも、ここの仕事は楽しいよ。人に見せるために記録するなんて考えもなかったけど、イギリスに行っても手伝って欲し

い時は手伝ってあげるよ」

「麻衣は、頭は悪いが万能だからな」

「頭が悪いは余計だ!」

「それは失礼」

ナルはしれっと返した。ナルはお茶を一気に飲み干すと、所長室に向かった。その五分後に麻衣は所長室に紅茶を届けた。

二時間後、リンとジーンが戻って来たが、何の進展もなかった様子を見て、ジーンは残念そうにしていた。

「……ジーン。サイコメトリスト二人をペテンにかけるなんて、無駄なことはやめた方がいいよ」

「つまり、バレバレだったってことだね」

「そう言うこと。それより、数日中にナルの機嫌が悪くなる事態が起きるから」

「……本部から依頼でも来るの?」

「似たようなものかな。あたし多分、別行動になると思うんだよね。ナルに渡してある短剣で多少の身は守れると思うから。それでも気を付けてね。って、言ってもジーンもあたしと一緒にだけだね」

ジーンはわけが分からなかったが、とりあえず頷いた。

夜、ジーンはそのことをナルに話すと、ナルは眉間に皺を寄せながら、麻衣の言っている意味が分かったらしい。

「——って話なんだけど、どう言う意味だと思う?」

「……ジーン。お前、来週がテストだと言うことを忘れていたんだろう」

ナルに言われて、ようやくそのことに気付いた。麻衣の未来視は、麻衣とジーンのテスト期間中にイギリスから依頼があると言うことである。

そして、テスト開始前日。イギリスの本部から依頼が来た。場所は、驚くべきことにイギリスであった。

「と、言うわけで頑張ってください」

「ごめんね、ナル。さすがにテストを休むわけにはいかないよね。」

休むと、夏休みはずっと補修になっちゃうから」

「……とりあえず、先にテストが終了すると言う原さんに二日遅れで来てもらえることになった。二人とも、テストの最終日に必ず来い。分かったな」

「了解しました」

とは言ったものの、テスト期間は一週間。今までのパターンだと一週間で調査が終わることなど多々あった。微妙に調査のことが気になってテストが散々だったジーンは、テスト最終日の前日に連絡を入れた。

《ユージン・デイヴィスですが、そちらにナルが行っていると思うんですが、調査の方、どうなっていますか？ ——— そうですか、

分かりました。では、予定通り明日の午後の便で日本を発ちます》
電話が終わった後、ジーンは隣の部屋の麻衣を訪ねた。

「麻衣。調査、まだ終了してないって」

「イギリスに電話したんだ。誰か、ケガとかしてない？」

「それは大丈夫みたい。イギリスメンバーにまどかと三人ほど若い子加わっているみたいだけど。かなり、手強いみたい」

「そんなことより、今はテスト勉強をしちゃおう。……ジーンってナルのことが気になって、気も漫ろなんだもん。補修なんかになったら、本当にナルに怒られるだけじゃ済まないと思うけど」

「……そうだね」

翌日、テストが終わると、どこかへ行こうと言う友達に謝って、

二人は一旦、帰って荷物を持つと空港に向かった。

「麻衣はイギリスにいたことがあるって言ってたよね？ 昔のことって覚えてるの？」

「おぼろげなら。それよりも、空港のチェックで日本刀持ってなくてよかったって思っちゃった。手に入れてたらやばかったよね」

「そうだね。それは言えるかも。……ナル、無茶してないといいな」

途中乗り換えを経て、ジーンと麻衣はイギリスに到着した。空港に二人を迎えに来たのはまどかと恐らくイギリスメンバーの一人だ

った。

「ジーン、谷山さん。久しぶりね」

「まどか。それに、ディックが迎えに来てくれたんだね」

ジーンとそのディックと呼ばれた男性は知り合いのようだ。麻衣は、ディックがリンと同じメカニックだと教えてもらった。

「イギリスメンバーって、ディックの他に誰が来てるの？」

「ミリーとマークよ。二人とも日本メンバーは優秀だって褒めてたけど、ちよつと、場所に問題がありすぎたみたい。これ、今回の調査内容だから読んでちょうだい」

まどかはそう言いながらジーンに英語のものを、麻衣に日本語のものを渡した。しばらく二人ともそれを読んでいたが、突然、麻衣が奇妙なことを言った。

「……まどかさん。地下は調べなかったんですか？」

「地下？ そんな話は聞いてないけど。谷山さんには分かるの？」

「まあ……」

運転しながら会話を聞いていたディックは不思議そうに尋ねた。

「ジーン。彼女は、能力者なのかい？」

「そうだよ。ナルが僕よりも頼りにするくらいね。麻衣がいれば、この調査は解決するんじゃないかな」

「そんなに優秀なのかい？」

「谷山さんは、十五年前からすでにSPRの極秘扱いされるぐらいなのよね」

「……森さん。あたし、極秘扱いされているのは初めて聞きましたけど」

「あら、似たようなものでしょ。それよりも、あと二時間くらい掛かるからね」

空港から車で三時間。ようやく今回の調査先に到着した。車から降りるなり、ジーンは建物の周りに漂っている霊達の多さに唾然としていた。

「こんな所で調査してたんだ……」

「数が多過ぎて人手も機材も足りないのよね。それにしてもすっかり遅くなっちゃったわね」

時刻はすでに夜の十一時を回っていた。

「ナール！ 到着したよ！」

「遅い！ とりあえず麻衣はお茶」

人数を確認してから、麻衣はキッチンに向かった。

「文句は飛行機に言っつてよね。それよか、調査の方、何か進展あった？」

「霊の数が多すぎる。今、原さんとマークに二階を、ミリーと松崎さんに三階を回ってもらっているが、これまでも特に多いと言う場所も見当たらない。ちなみに夜も昼もずっとこの状態だ」

昼も、と言われて、ジーンは冷や汗が出た。

「ところでナル、谷山さんが地下は調べたのかって言っつてたんだけど」

「地下？ そんな物があるのか？」

「依頼人の話では、そんな話はなかったわよね」

ちょうどその時、麻衣が紅茶を淹れて戻つて来た。とりあえず、ベースにいる人数分だ。

「麻衣。地下室とは何のことだ？」

「何って、地下室は地下室だよ」

「……調査と関係があるのか？」

「関係あると思う。調査先が遠すぎて、今回いつもみたいにははっきり見えなかったから」

「分かった。カメラは設置できるか？」

「その前に、この建物内を見学して来るね」

麻衣はそう言うと言椅子に座り、一瞬の内に幽体離脱した。あまりの速さに、麻衣の幽体離脱を初めて見るまどかやディックは驚いていた。

「今のが幽体離脱？ ジーンが優秀だつて言う理由が分かったよ」

「それよりもディック、カメラと一番長持ちするバッテリーを用意

しておいてくれ」

「分かりました」

建物は三階建て。麻衣の話によれば地下室が存在するようだ。なぜ、こんなにも霊が集まるようになってしまったのか、それを調査するのがナル達の仕事だった。

麻衣は幽体離脱して、屋敷内を見学中、見回り中の二組に出くわした。

『真砂子』

「麻衣。いつ来たんですの？」

『今さっきだよ。そっちの人がマークさんだね。よろしく』

「真砂子。彼女は一体……」

「日本支部のメンバーですわ。麻衣。後で、お茶を淹れて下さいな」
『任せて。じゃあ、また後でね』

その後、麻衣はミリーと綾子にも挨拶をした。それから地下に向かい、一通り見回ると、肉体に戻った。

「地下はあったか？」

「あったよ。出入り口を探したんだけど、ちょっと見つからなかったな。それよかカメラ、これでいいの？」

「ああ」

「カメラの設置なら僕が……」

「大丈夫。これは、あたしにしかできないから」

四十？はあるカメラを軽々と持ち上げると、麻衣はベースの外に向かった。ジーンはそれに付いて行った。

「麻衣。カメラの方、僕が持つって言ったのに」

「それよりも、ジーンは憑依されないようにね。真砂子にはお守り持たせてあるけど、今回の調査って霊媒師が全部で四人もいるんですよ？　ちょっと心配だな」

カメラを設置してから、麻衣はテレポートで地下室にカメラを設置してきた。

「もう、置いて来たんだ」

「うん。組み立ててからだから、楽だった。ここのすぐ下だよ」

「……ところで、麻衣のことってイギリスメンバーにどのくらい話してもいいの？ 能力のことか」

「まどかさんとナル次第かな。ところで今回の責任者はどっちだと思おう？」

「まどかかな。一応、まどかの方が上司だしね」

ベースに戻ると見回り組が戻って来ていた。麻衣は自己紹介が済むと、綾子と真砂子は仮眠を取るようになった。

「……あなた、オリヴァーとどう言う関係なの？」

「どう言うって……上司と部下だけど。ジーンとはクラスメイトだけだね」

「ミリー。麻衣の言っていることは本当だよ」

「だって、オリヴァーはあなたの名前を何度か呼んでいたもの。ただの関係なら、ジーンを頼るんじゃないのかしら」

ミリーのその言葉を聞いて、ジーンが納得したように頷いた。

「ナルが麻衣を頼る理由は、見てれば分かるよ」

麻衣は話に興味がなくなったのか、すでに仮眠から起きた安原、滝川と色々と話していた。

「麻衣。地下があるつつうのは本当か？」

「そうだけど、入り口のスイッチが分かんないんだよね」

「谷山さんでも分からないんですか？」

「入り口は大体分かるんだけど……。ナルにもさっき話したんだけど、朝になったら探してみようね」

「そうだな。……しかし、麻衣が一人いるだけでこんなにもほいほい進展するんだったら、調査の日取りをちよいとずらしてもらいたかったな」

「でも、それだと映像が撮れませんよ」

「それにさ、あたしはばーさんみたいに調伏も得意じゃないしね。

……それにしても、想像以上にイギリスって遠いんだね。ナルやジーンがほいほい帰らないはずだね」

「それで、原因は分かったのか？」

「地下にカメラを設置してきたから、あとは明日かな。ところで安原さん、大丈夫なんですか？　こんな所にいて。いつもなら色々と調べているのに」

「今回、事前はかなり調べてあったので、それほど必要なかったんです。所長曰く、谷山さんの情報待ちですね」

「そうなんだ……。今夜は時差ぼけ対策寝ないからなあ。飛行機で寝すぎて眠れないし。じゃあ、安原さんにこれ、貸してあげます」

麻衣はそう言いながら、携帯からストラップを外して安原に渡した。

「何ですか、これ？」

「カメちゃんです。あたしの式神」

「カメちゃん？」

「おこぶ様⇒こんぶ⇒わかめ⇒カメってことで、カメちゃん。能登事件の原因になった神様だから役に立ちますよ」

あっけらかんと言う麻衣に対して、安原は興味津々に眺め、滝川はあの時のことを思い出して冷や汗を垂らしていた。

その日の夜は、少し騒ぎがあったが、調査が始まってから毎回だと言うので大したことではないのだろう。

「――で、地下室の入り口と言うのはどこにあるって？」

「一階の廊下だよ。絨毯が敷き詰めてある」

「本当に？」

ジーンの質問に麻衣は頷いた。

「それはつまり……絨毯を剥がさねえといけないってことか」

「そうなるな。入り口は大体どの辺りだ？」

「廊下の大体真ん中かな。昨夜設置したカメラは固定タイプだけど、ハンディがあれば撮影して来れるけど」

「他の奴が中に入ることはできるか？」

「できると思うけど、テレポートの感覚に耐えられるかな」

「ジーンと一緒に行ってくれ。あいつは経験があるだろ」

「そう言えばそうだったね。……できることなら、ぼーさんを連れて行きたいんだけど……」

麻衣はそう言いながら滝川を見た。

「俺ご指名ですか？」

「ダメかな？」

「それはつまり、ここの親玉は危険と言うことか？」

「危険って言えば危険かもね。英語が理解できると惑わされやすそう」

麻衣にそう言われて、ナルと滝川はこれまでの数日の調査を振り返った。確かに、真砂子に比べてイギリスメンバーの霊媒師の憑依率は高いのだ。

「それはつまり、ぼーさんは英語は不理解と言うことか？」

「堪能ではなさそうでしょ。イギリスメンバーは当然だし、ナル、ジーン、リンさん、ジョンもダメだし、安原さんは向いてないし、綾子も海外旅行が多いから恐らくできるだろうし、真砂子はある所に連れてったら可哀想でしょ。だから、ぼーさんなんだよ」

「理屈は分かんが、つまり、俺なわけね」

「そう言うこと」

麻衣と滝川はハンディカムと懐中電灯を持って地下室に向かった。一方、他のメンバーは絨毯を剥がしたり、地下室の扉のスイッチ探しをした。

一方、地下にいる麻衣と滝川は、光の射さない地下室内を散策していた。

「本当に、何言ってるんだか分かんねえが、奇妙な声が聞こえんな」

「魍魎の声だよ」

「麻衣は何て言ってるのか分かるんか？」

「生者を誘う言葉かな。ノイローゼにしたり、憑依されやすい状況を作ってるんだと思う。ここに来た人達がノイローゼになったりして死んだって話なかった？」

「おう、あったぜ。ここに住んでいた人間のほとんどが自殺したり

しているらしい」

しばらく歩いてみると、祭壇が見えた。あからさまに怪しいその祭壇に麻衣は手を触れた。

「何か、見えるか？」

麻衣は苦痛と言うよりも、苦い物を口にしたかのように眉間に皺を寄せた。

「……ぼーさん。大体撮れたよね？ 戻ろっか」

滝川はわけが分からなかったが、こんな所に一人取り残されたくはなかった。

「――麻衣、ぼーさん報告を」

「……祭壇がありました。詳しいことは、ぼーさんが撮ってきたビデオを見てもらえば分かると思うけど」

そう言われて、とりあえず全員でビデオを見ることにした。だが、麻衣の能力を知らないイギリスメンバーは、二人がどこを撮影してきたのか不思議でたまらなかった。

《ねえ、ジーン。彼女、何者なの？ オリヴァーがあんなに頼りにするなんて、あなただけだと思っていたわ》

《まどかに聞いてみるといいよ。それに、あと半年もすれば、麻衣はイギリスに来るからその時、本人から聞いてみたら》

《教えてもらえないのかよ》

《まどかがSPRの極秘扱いになっていると言っていたが、それはつまり、彼女は能力者なんだろう？》

《あら、そうなの？》

《麻衣のことは日本にいる僕達にも謎が多いんだよ。ただ、麻衣と仲良くなると大抵のことは教えてもらえるよ》

ジーンがイギリスメンバーと話していると、すでにナルの指示で日本メンバーはバラけていた。

《いつの間に！》

《四人とも、仕事しろ》

ナルの機嫌が悪くなる前に、ジーン、ディック、マーク、ミリー

は慌てて指示に従った。

とにかく、この屋敷は広い。霊媒師が四人いても足りないと言うことはなかった。

＜ナル。ジョンがさ、居間のシャンデリアだけ古い物だって言うてるんだけど、そっちのシャンデリアって確か、電気だったよね？＞
ホットラインが繋がり、ナルはベースのシャンデリアを見た。

＜そうだな。確かに電気だな。他の場所も見えて来い＞
＜了解＞

ナルは、他の場所を見回っているメンバーにも、シャンデリアについて調べるように伝えた。その結果、やはり、居間のシャンデリアだけが古いタイプのものであることが分かった。

「じゃあ、居間のがスイッチってことなのかしら？」

「地下室のスイッチってことですやろ？　せやけど、ジーンさんが動かしてみよう思ったけど、動からはなかったんです」

「……じゃあ、地下室のスイッチじゃないってこと？」

まどか、綾子、ジョンの三人は考えた。

「それはともかく、居間のシャンデリアが地下室の入り口にカギになっている可能性は高い。ただ、何をどうすれば開くのか分からない」

「スイッチに関しては、あたしが今夜、過去視してみるよ」

「そうだな……」

その夜、麻衣は過去視をしたが、明け方どこかに電話を掛けているようだった。それを偶然見掛けたのは、イギリスメンバーのディックとマークだった。

《あれ、どこに電話してるんだ？》

《さあ》

《オリヴァーが彼女に過去視してもらうとか言ってたけど、あれって本当なのかな？》

《まどかに聞いてみたけど、彼女が極秘扱いされている理由については教えてもらえなかった》

《でも、彼女、来年の春にはこっちに来るんだろ？ 被験者なのか、それともオリヴァーと同じ研究者なのかな？》

電話を掛け終わった麻衣が、二人の存在に気付いた。

「あ、おはようございます」

「「おはよう」」

「地下室の開け方分かりましたよ。今からナルに報告に行くんですけど、ご一緒にどうですか？」

「じゃあ、一緒に行こうかな」

「そうだね」

麻衣が言うには、シャンデリアにロウソクを点すとシャンデリアのスイッチが入り、地下室の扉が開くらしいとのことだった。ナルはロウソクを用意させて地下室の扉を開けることにした。

居間のシャンデリアにロウソクを設置し火を点すと、廊下の方でギギギと音が響いた。廊下にいた数人が、その様子を見ていた。

《すごいわ！ 本当に開いたわ》

「マジかよ……。俺、あそこに行きたかないな」

「ぼーさん。諦めようよ」

肩を落とす滝川にジーンが背中を叩いた。

「ジーン。おめえな……」

結局、地下室にはナル、滝川、真砂子、マークが入ることにした。ナルは麻衣に案内させるつもりでいたのだが、なぜか、入る段階になって麻衣の姿が見えなかったのだ。

「……まどか。麻衣はどこに行った？」

「え？ あら？ どこに行っちゃったのかしら？」

「先ほどまでそこにいましたよね？」

「ベースに戻って来たら、地下室に来るように伝えてくれ」

ベースに残ったのはまどか、安原、リン。廊下の入り口にジーン、綾子、ジョン。居間のロウソクを管理するのにミリーとディックが残った。

地下室は建物とほぼ同じ大きさがあり、前回、麻衣と共に地下室

に入った滝川の案内で、祭壇の場所まで辿り着いた。

「これが、麻衣が言っていた祭壇だな？」

「ああ。そうだ」

「原さん、マーク。見えるか？」

「見えますわ。英語で話していらっしゃるみたいですけれど、麻衣の指輪が守って下っていますわ」

一方でマークは相当参っているようだった。

「大丈夫か？」

「そう言えば、麻衣が英語が分かると危険だと言っていたが、やはり、そうみたいだな。何が聞こえる？」

《死ねって言われている。自分達の仲間になれて……》

混乱しているのか、マークは英語で喋っていることに気付いていなかった。

「なあ、戻った方がいいんじゃないか？」

「……そうだな」

「ナル。ここの祭壇から一番強い力を感じますわ」

「やはり、この祭壇が原因か。とりあえず、戻って対策を立てよう」

廊下では、地下室に向かった四人を心配そうに待っていると、麻衣がやって来た。

「あれ？　もしかしてもう入っちゃった？」

「麻衣。あんた、どこに行ってたのよ？」

「ごめん。携帯の電波が届かなくてさ」

「携帯って、どこかに電話掛けてたの？」

「話は後でね。とりあえず、地下室に行ってくる」

麻衣が来たのを見て、ジーンがホットラインでナルに知らせた。

<ナル。麻衣が来たよ>

<分かった。……それよりも、マークが憑依された可能性がある。ジョンをよこしてくれ>

<了解>

「ジョン。マークが憑依されちゃったかもしれないってナルが言っ

てる。麻衣と一緒に来て欲しいって」

「分かりましたです」

「じゃあ、行こうか」

ジーンは懐中電灯をジョンに渡した。麻衣とジョンの二人が地下室に向かった。

「麻衣さん。どうですか？ 何ぞいてはりますか？」

「まあね。それよか、ジョンってやっぱり神父なんだね。幽霊がジョンの周りを避けてる」

「そうなんですか？」

「うん。まあ、魔女の館じゃ当然だよ。それよりも、少し急ごうか。マークがいなかったら、祭壇の場所までヒョイんだけどね」

麻衣はイギリスに正式に来るまで、能力のことは概ね隠しておきたいようだ。滝川、ジーンの二人から、テレポートの感覚を聞かされていたジョンは苦笑した。

祭壇のある部屋に辿り着くと、マークは滝川に取り押さえられていた。

「ジョン！ 早くしてくれ！」

「分かりましたぞす——」

ジョンは聖書を読み上げて、マークに聖水を振り掛けた。悪魔祓いは成功したようだ。

「英語が分かる霊媒師は特に危険だって言っただけなのに、何で連れて来たのさ」

「お前がいなかったせいだろうが」

「真砂子にケガまでさせてさ。……真砂子、大丈夫？」

「かすり傷ですわ」

麻衣は真砂子の傷に手を触れた。すると、傷は何事もなかったかのように消えた。

「相変わらずすげーな。それよか、どこに行ってたんだ？」

「電話掛けてたの。ちよっと、確認したいことがあってね」

「確認と言うのは何だ？」

「ここの持ち主が誰なのかって」

「依頼人だろう」

「ナルは依頼人に直接会った覚えあるの？ 代理人がいつもいたんじゃない？ ヴラド事件の時みたいに」

そう言われてみれば、と、ナルは思った。

「それと、何の関係がある」

「祭壇を壊そう。あたしが許可するから」

「「「は？」」「」」

ナル、滝川、真砂子、ジョンの四人が怪訝な顔をした。

「何で、祭壇を壊すのに麻衣が許可するんですの？」

「そうだぜ。依頼人に許可を得るべきなんじゃないのか？」

「まだ、祭壇を壊すとは言っていないが」

「麻衣さん。どうしはったんですか？」

「だって、今回の依頼人ってあたしの財産管理人なんだもん。ほら、以前、みんなも会ったでしょ。ジョージだよ。この屋敷、あたしの父方のお祖母さんの実家なんだよ。つまり、本当の持ち主はあたしなの」

その言葉に、ナルの眉間に皺が。

「……つまり、麻衣が本当の依頼人と言うことか？」

「違う。あたしはジョージにイギリスに住むための家を探してもらってただけど、どうせこの屋敷があるんだからって思ってたみたい。住めるように色々と改装している内に霊の通り道を塞いじやつたんだよね。それで、SPRに依頼したみたい」

「……とにかく、一旦上に戻ろう」

「先に戻っていいよ。あたし、壊しちゃうから」

「どうやって？」

「これで」

麻衣がそう言うと、麻衣は手に持っていた長い包みを取り出した。それは、明らかに剣だった。

「どこでそれを？」

「この屋敷に儀式用に使っていた物だよ。これも取りに行ってたから遅くなっちゃったんだよ。それよか、マークさんを連れてってくれないかな」

「そ、そうだな。真砂子ちゃん、ナル、ジョン。行くぜ」

滝川はマークを負った。真砂子とジョンが滝川に付いて行く中、ナルは動かないでいた。

「あれ？ ナルは行かないの？」

「僕は見届ける義務がある」

「……見てるのは構わないけど、自分の身は自分で守ってね」

「ああ」

ナルは、麻衣の仕事を見るのは実は初めてだった。ナルならばP Kを使うところだが、麻衣は祭壇に剣先を当てると一気に振り下ろした。

祭壇は真っ二つになり、悲鳴のような声が聞こえた。少し、破片が飛んだくらいで何事もなかった。

「終了」

「もう終わったのか？」

「うん。後は、家中の窓やドアを開けておくだけで空気の入れ替えができるよ。……ジョージのこと、怒らないであげてね。心霊データが撮れるかと思ってお詫びだと言ってたから。代わりにナルへの支援額を増やすように頼んでおいたからさ」

「別に……」

地下室に設置してあったカメラにはバッチリと、麻衣が剣を振り下ろして祭壇を真っ二つにするシーンが映っていた。

「麻衣ちゃんって本当にすごいわ……。来年の春が楽しみ」

まどかは今すぐにでも、イギリスに正式に来てもらいたいぐらいだと思っていた。

後日、麻衣の話は日本のメンバーのみに聞かされた。

ビデオテープ

イギリスでの調査終了後。SPRの本部に連れて来られたメンバーは、本人の希望もあって、麻衣が三歳の時に撮られたと言う実験映像を見ることがになった。

「谷山さん。本当に構わないの？」

「はい。と、言うよりも、お父さんが生きていた時の姿も少し映ってるんですよ。あたしはそれが見たいんです」

「……分かったわ」

実験は正式な物ではなかったが、この映像を見た関係者から極秘扱いを受けたと言う代物である。

「そう言えば、そんな噂を聞いたことがありましたね。ナルは、サイ研究に興味がありませんでしたから、耳にした程度でしたが」

「僕も噂で聞いたかな。小さい子供が、って話だったから、まさか、僕達の一つ下だとは思わなかったけど」

ビデオには、若い頃のマーティンと、生前の麻衣の父親、それと三歳の頃の麻衣が映っていた。映像は、固定されたカメラで撮られているようで、そこから位置はほとんど動いていなかった。

《麻衣。それを浮かせられるかな？》

《それって、どれ？》

《机の上の箱だよ。ちょっと、重いかもしれないけど》

《中身なあに？ ……なんだ、何も入ってないのね》

麻衣の言葉に、麻衣の父親は苦笑していた。

《マーティン。麻衣には中身がある方が嬉しいようだ》

《仕方ないね。麻衣。この実験が終わったら、ケーキを食べに行こうか？ 私が奢るよ》

《本当？》

《ああ。本当だとも》

《マーティン。君は、俺の娘を太らせる気かい？》

麻衣の能力実験は、物体浮遊、サイコメトリ、透視、自然発火などが行われていた。

ビデオは一時間ほどの映像だったが、見終わった後、メンバー全員が驚いていた。ただ、一人だけみんなと違う驚き方をしていたのは、麻衣本人だった。

「あたし、子供の頃は英語、喋れたんだ……。何で、それが今の英語の成績に繋がらないんだろう……」

「麻衣！ そんなことよりも、何なのよ！ あの映像は！」

「そうですわ！」

綾子と真砂子の二人に詰め寄られて、麻衣はなんと答えていいのかわからなかった。

「……この映像を偶然見ちゃったお偉いさん達に、谷山さんはモルモットにされそうになって、家族で日本に渡ったのよね」

「あたしはその辺の詳しいことは覚えてないんです」

「そう言えば、ジーンを捜しに日本に行くと言った時も、上の連中が案外あっさりと許可を出していたな。それに、分室維持の申請の時もすんなりと下りた覚えが」

「上層部としては、ナルに日本にいられるのは嫌だけど、谷山さんを探す足がかりにはなると思っていたみたいね。まあ、まさか捜している本人がナルの所で働いているなんて誰も思わなかったでしょうけどね」

「ですが、谷山さんに会えばすぐに分かったのではありませんか？」

「そうですね。今の映像を見ると、谷山さんは子供の頃の面影がそのままありますしね」

「このビデオ、ナルの公開実験の物よりも知っている人が少ないのよ。正式な実験映像ではないから。今回も探すの苦労したのよ」

「せやけど、極秘なんですよね？」

「この映像が本物だって知ってる人はね。谷山さん達が日本に渡った後、谷山さんのお父さんの情報は抹消されたの。故意に誰かの手によってね。谷山さんから話を聞いた後、わたしは色々調べてよ

うやく辿り着いたってわけ」

「ところでまどか、このビデオ、誰が持ってたの？」

「サー・ドリーよ」

「「何!!!!」」」

ナル、ジーン、リンの三人が驚いた。

「え？ え？ サー・ドリーって誰なの？」

「……僕の師に当たる人物だ」

「まどかさんじゃないの？」

「まどかもサー・ドリーの弟子なんだよ。つまり、まどかはナルの姉弟子みたいなものかな。まあ、正確には上司なんだけどね」

「そう言えば、谷山さんは来春にはSPRに入る予定になってましたけど、どう言うお立場になるんですか？」

安原の言葉に、麻衣はハタと気付いた。

「ジーンなんかと同じような感じじゃないかな。いわゆる被験者？」

「まあ、そうなるだろうな」

「それだと、誰が研究者になるんだ？」

「多分、今の状況から考えると、ナルがわたしになるでしょうね。」

谷山さんがわたし達じゃ嫌だって言うなら別だけど」

「そんなことありません。これ以上、自分のことを色々と説明するのも面倒だから、できればナルかまどかさんなんかの方が都合がいいかな」

「じゃあ、決まりね」

その後、まどかは用があるからと言って出て行った。

「何にしても、もうイギリスとお別れなのね。ちよっとショッピングとかしたかったわ」

綾子の愚痴に、ジョンが苦笑していた。

「まあ、調査が終わったら長期滞在はできないわな。ホテル代が掛かってしまうし」

「そうですわね。ナルやジーン、リンさんのようにこちらにお家があれば違いますけれど」

「ナルはしばらくこっちに残ると思うけど、僕は、夏休みの宿題を取りに行かないといけないからなあ……」

夏休みの宿題と自分で言って、ジーンは憂鬱そうだった。そのことを思い出して、麻衣も溜め息を吐いた。

「あたしは後一週間ぐらいしたら日本に帰るよ。ヒマだったら、みんなも泊まれる場所あるけど。ただ、自炊になるけど」

「それって、どこなのよ？」

「この間の調査場所。あの屋敷の持ち主、あたしだって言ったよね？ あそこの処分手続きが一週間ぐらい掛かるんだよね。それまでの間住むんだよ」

「えー！ 麻衣はてっきり僕達の家に来てくれるかと思ってたよ」

「遊びには行くけど、あそこがあんなことになってるんだったら、ついでだから処分していこうかなって思ってたさ」

「……あの屋敷を処分するのか？」

「売るか、壊すかは分かんないけど、法的手続きを取って処分しちゃうおうと思ってる。……本当は日本の不動産も処分したいんだよね。何にしても、イギリスの成人が十八歳でよかった」

「日本の不動産って何のことよ？」

「あたしが孤児だってことは話したよね。お母さんの系統の不動産と、父方の祖父の不動産があって、現在、全部小手川のおじさんが管理してくれてるの。不動産を放棄したり、寄付したくても成人年齢に達してないときになくって」

「それって、どのくらいあるの？」

「えっと……。以前、能登の帰りにジョージに会いに行った時に行った場所と、京都の方に家屋が三つぐらいあって、東京の方にも何だかあるって言ってたかな」

麻衣の言葉に、全員が啞然としていた。

「あんたって、金持ちだったのね……」

「現実的じゃないものばかりだけどね……。だから、高校卒業してイギリスに行っても、二十歳になったら一度は日本に戻らないとい

けないんだよね。さすがにイギリスと日本じゃ、遠すぎてテレポトは使えないからなあ……」

「そう言えば、谷山さんのテレポトって、どのくらいの距離を飛べるんですか？」

「やったことないなあ……。今度試してみようかな」

結局、仕事があると言う真砂子、滝川、ジョンは翌日帰国し、一週間後に残りのメンバーが日本に戻った。

正しい調査の仕方

それは、すっかり寒くなった十二月のこと。一人の人物が渋谷サイキック・リサーチのオフィスをやって来た。

「いらっしやいませ。ご依頼ですか？」

越後屋風の笑顔で安原が対応した。

「あの、こちらは渋谷サイキック・リサーチですよ？」

「ええ。その通りです。主に心霊現象を取り扱っている事務所です」

「こちらに谷山麻衣と言う高校生がいるはずなんですが、まだ来てませんか？」

「谷山さんのお知り合いですか？」

「そうです。あ、申し遅れました。私は警視庁特捜課の警視で小手川浩志と言います」

浩志はそう言いながら名刺を差し出した。それを受け取りながらも、安原は表情を変えない。

「刑事さんが谷山さんに何のご用でしょうか？」

「あ、用事があるのは麻衣の方じゃなくて、こちらの所長なんです」
麻衣と呼び捨てにする浩志に、安原は不思議に思ったが、とりあえずお茶を出して所長室のナルを呼んだ。小手川と言う名前を聞いて、麻衣の日本の後見人と言う警察庁長官を思い出した。

何の用事かは分からないが、ナルは、とりあえず会ってみることにした。

「デイヴィス博士。お久しぶりです」

「久しぶりです」

ナルの無愛想な態度に、浩志は苦笑した。

「何のご用でしょうか？ ジーンのことに關しては、すでにこちらで解決済みですが」

「ユージン・デイヴィスの件については、麻衣から全部聞きました。今日はそのことではなく、警察として頼みがあって来ました」

「警察の依頼は、麻衣が個人的に受けていると聞いたことがあります」

「その通りです。ただ、彼女は来年の三月になったらイギリスに行ってしまう。ですから、警視庁の方で実験的に心霊や超常現象を捜査する部門を立ち上げることになったんです。それで、こちらにそのノウハウを教えていただけないかと思ひまして」

「警察の方と関わるのは遠慮したい」

「そう仰ると思っていました。ですから、この依頼を受けて下されば、デイヴィス博士が日本にいられる時は麻衣と同じ権限を施行するとお約束します」

「麻衣と同じ？」

「麻衣の戸籍に関する情報は全て、国でもトップシークレットになっています。デイヴィス博士のことですから、麻衣のことを調べたことがあると思いますが、本人が話してくれたこと以外、何も分かっていなかったのではありませんか？」

ナルに頼まれて、麻衣について調べた経験のある安原は、その時のことを思い出して納得した。麻衣は、日本においても、イギリスにおいても極秘の機密事項に所属するのだ。

「……分かりました。受けましょう」

「ありがとう。……ところで依頼の内容だが、麻衣達が来るまで待つていてもいいかな？ 二度手間になるから」

「どうぞ」

それから十分くらいして、麻衣とジーンが事務所に来た。

「こんにちは」

「間に合った」

二人は入るなり、オフィスに人がいるのに気付いた。いつものイレギュラーではない。

「麻衣。久しぶりだな」

「あ、浩君！ どうしたの？ 来るなんて言ってなかったじゃない」
「渋谷サイキック・リサーチに依頼に来たんだ」

「依頼だったら言ってくれば、引き受けたのに」

「麻衣のことも含めて依頼なんだ」

浩志は、麻衣とジーン、機材室から出て来たリンも含めて依頼内容と理由を説明した。

「そっか、あたしがイギリスに行っちゃうと、その役目をやる人がいなくなることまで考えてなかった。……ナルに頼めばって言いたいところだけど、ナルもずっと日本にいるわけじゃないだろうしね」

「そのための心霊捜査課が必要なんだ。調査に必要な物はこちらで揃えよう。それと、俺ともう一人、調査に加わる人間がいるがいいだろうか？」

「一般の方は本当は遠慮したいんですが」

「すまない。ノウハウを覚えてもらうためには一人では大変だね」
調査に同行したのは広田正義と言う浩志の後輩だった。

「先輩。幽霊なんて子供だましを信じてるんですか？ 超能力だ何だって、そんなの嘘っぱちに決まってるじゃないですか」

彼は、心霊や超能力に否定的な性格だった。そんな広田を見て、安原と浩志は苦笑した。安原は母校の調査でSPRのメンバーに会うまで、浩志は麻衣に出会うまで、広田ほど完全に否定していたわけではないが、いると信じていたわけではなかった人種の一人であった。

「浩君、広田さん。機材設置の仕方を教えますんで、一緒に来て下さい」

麻衣はそう言いながら、四十kgあるカメラを片手で持ち上げ、もう片方の手にケールと三脚を掴んだ。

「俺が持とう」

女子高生である麻衣が重い物を持つのを見て、広田が慌てて言った。

「これは、あたしの分です。お二人の分はそっちです」

よく見ると、そこには同じ組み合わせがあと二組あった。持ってみると、想像以上に重いし持ち辛い物だと分かった。

「……谷山さんはいつもこんなことをしているのか？」

「いつもの調査は、ぼーさんやジョンって言う協力者がいて、その人達が手伝ってくれるんです」

「麻衣が以前話してくれた、元高野山の坊主のミュージシャンとエクスシストだったね」

「うん。後は巫女さんとか、霊媒師の真砂子なんかですね」

「なぜ、今回はその連中がいないんだ？」

「……浩君がSPRの調査の仕方を学ばせて欲しいって言ったからです。あ、カメラは全体を見渡せるように設置して下さい」

麻衣は三脚を組み立てて、その上にカメラを置いた。インカムでリンの指示を聞き、角度を調節した。

「幽霊は、ドアや窓を通るわけではないので、目撃情報に合わせてその都度角度を変えることもあります。その辺は、防犯カメラと同じかな」

「こっちはどうするんだ？」

「それは、他のカメラの死角を映すためです。カメラって三台ぐらいあると死角がなくなるんですよ。どんな部屋でも、カメラの背後は映らないから。こう言う一部屋だけってのは、そのやり方ができるんです」

カメラを設置し終わった麻衣は、ゾーンと交替して、建物内の見回りに浩志と広田に付いて行くように促した。

「カメラ設置と霊視は大体別々に同時進行するんだけど、今回は二人がいるんで特別だよ」

ナルそっくりで、軽い口調のジーンとのギャップに広田は戸惑っていた。霊視に関しては、見える人にしか理解できないので、ジーンは、勘のいい人ならその手の能力があるかもしれないと告げた。

「それから、最後にぼくの出番です。ぼくの仕事は、外部調査です。ご近所への聞き込みと、過去の調査ですね。この辺は、警察の方はお得意でしょう」

二人一編に付いて行くわけにはいかないので、広田が安原に付い

て行くことになった。

「麻衣は、いい仲間に恵まれたな」

「……そうかもね。でも、浩君に言われるまで、自分がイギリスに行った後のことまで考えてなかったんだなって思った」

「調査の方法は大体分かったが、問題は除霊とか浄霊だよな」

「それは、ちゃんとした専門家に依頼した方がいいよ。素人が下手に手を出すと二次災害になるし」

「あとは、過信し過ぎないことだよね」

麻衣と浩志の会話にジーンが加わった。

「あの広田さんって、こう言うのに不向きなんじゃないかな。霊達を怒らせて、被害を増やしそう」

「上層部からの命令なんだ。常識人で、正義感が強すぎるもんで飛ばされたんだ」

「……まさか、浩君も？」

「俺が？ まさか、違うよ。俺は知り合いにいますから少し詳しいってことで加わったんだ。それに、麻衣達だって見知らぬ警察が来ても話を信じて協力するなんてできないだろう」

浩志の言葉に、麻衣とジーンはそろって頷いた。

「後は、機材とか人材だよな。裁判の時なんかの証拠品に使われる物になるわけだから……」

すでに仕事モードに入っているのか、浩志は麻衣とジーンから離れて、ナルやリンと色々と話していた。

「小手川さんって、麻衣の知り合いだけあってナルに臆することなく話してるよね」

「って言うよりも、対等に話してる感じがする」

「……言われてみればそうかも」

その後、実は、浩志はナルの論文を事前に読んだことが分かった。夕方になって、聞き込み調査から戻った安原と広田だったが、広田は少し疲れていた。

「どうだった？」

「……こいつ、警察よりも優秀かもしれない……」

それは、広田にとっては最高の褒め言葉だった。口八丁、手八丁、必要なものを抜粋して調べるやり方、利用できるものを利用する狡猾さ。それは、犯罪捜査でも必要な分野である。

「それで、何か分かりましたか？」

「ええ。面白いことが分かりましたよ。ノイローゼで自殺したつて言う話ですが、ご近所ではそんな噂、全くなかったそうです。前日まで、いつも通りに出社したそうですが、ただ、ご近所の人の話では、自殺する可能性があるとしたら、弟さんの方だったんじゃないかって」

「弟がいるんですか？」

「ええ。二歳年下の弟で、大学受験に二回ほど失敗して、仕事もせずにフラフラしていたいわゆるプータローでした」

「その人物は今、どこに？」

「ご親戚が仕事を紹介してくれたと言って北海道の方に行ったと、ご近所の方は聞いていますね。ただ……」

「ただ？」

「こちらのご親戚には北海道在住の方がいないみたいなんですよね。ご両親はいわゆるご近所さん同士の結婚だったので、その辺のこともお詳しいみたいでした」

安原から話を聞いたナルは、今度は浩志の方に向き直った。

「小手川さん。事前の調査内容と一致していない部分がありますが？」

「……こちらの調査ミスだ。すまない」

「先輩！」

広田が文句を言おうとしたが、それを浩志は手で制した。

「お前の言うとおりに、安原君は優秀だ。一般人は警察と見ると嘘を吐くことがある。それに、社会的立場ある故にある程度の介入ができなくなる。だからこそ、同じ事件でも探偵を雇ったりする」

「つまり、警察官であることを忘れることも必要だってことですか

？」

「ちょっと違うな。警察であるために事件が解決しないこともあるってことだ」

二人の会話を聞いていたナルが溜め息を吐いた。

「除霊、浄霊の方法はお聞きになりますか？」

「そうだな。一応、聞いておこう」

「では……。僕は通常、基本的には浄霊をするように心がけますが、相手によっては聞き入れない場合もあります。その場合、除霊することもあります。除霊や浄霊に関しては、しっかりした専門家に頼むといいでしょう」

「麻衣も同じことを言っていました」

「そうですか。今回は一応、ジーンが浄霊を試みます。それと、霊の神経を逆なでしないように、他の方は一切話さないでもらいたい」
「どうにかジーンの浄霊は成功し、今回の調査は終了した。」

心霊現象を信じ切れない広田は、心霊現象や超常現象がペテンだと証明してやると息巻いていた。一方で、浩志の方は警察の捜査のあり方について考えるようになったらしい。

「浩君がね、広田さんから話を聞いて、安原さんの調査能力に感銘を受けたって言ってました」

「そうですか……。ですが、あの広田さんって、調査に向いてないんじゃないかな」

「現実的すぎるよね」

「うん。それは、あたしも思った」

「「何かあったら、あの人が一番ここに泣きついてきそうだね」
「」」

三人の意見は一致した。

正しい調査の仕方（後書き）

リンさんはどこに行っただんでしょう。
ちゃんと存在はあるんですよ。

きっと生まれ変わってみせるから

三月。高校三年生だった麻衣、ジーン、真砂子の三人は高校を卒業した。

ナル達に先駆けて、イギリスに渡った麻衣は、SPRの本部で、まどかに付いて働くようになったらしい。

「はい。渋谷サイキック・リサーチです」

『あ、その声は安原さんですね。お久しぶりです』

「そのお声は谷山さんですね。どうしたんですか？」

『まどかさんがこっちに電話掛ける用事があるって言うんで、代わってもらったんです』

「所長にご依頼ですか？」

『そうです。調査じゃなくて論文ですけど』

「ジーンにも代わりますか？ ご本人、側でうずうずしていらっしやいますけど」

麻衣からの電話だと分かって、ジーンはソワソワしていた。

『じゃあ、代わってもらおうかな』

安原はジーンに受話器を渡した。

「麻衣。元気にしてた？」

『元気だよ。みんなに会えないのはちょっと寂しいけどね。あ、そうだ。ジーンに頼みがあるんだけど』

「何？」

『今度、イギリスに帰って来る時にお味噌と梅干持って来てくれなかな。こっちの子に話したら食べてみたいって言われちゃって』

「了解」

『他のみんなはどうしてる？』

「麻衣がそっち行っちゃってからあんまり来なくなっただけど、調査の時はいつも通りお世話になってる。小手川さんも時々顔見せてくれるよ」

『浩君が？ そっか……。とりあえず、ナルに代わってもらえるかな。伝えなきゃいけないこと伝えちゃうから』

ジーンは内戦に切り替えて、所長室のナルを呼び出した。

『ナル。イギリスから電話だよ』

「……お前が聞いておけ」

『麻衣からの電話でも？』

ナルは眉間に皺を刻ませながらも、電話を切り替えた。

「もしもし」

『うわ！ ナルだ』

「うるさい。喚くな」

『ごめんごめん。やっぱ、声が似てても性格が声音に現れるよね』

「ところで、何の用事だ？」

『論文のお仕事の依頼だよ』

「……いつも、まどかが言ってきたはずだが？」

『マンションの方じゃなくて、こっちに電話するって言うから代わってもらっちゃった』

「あ、そう。それじゃあ」

ナルが電話を切ろうとすると、麻衣は慌てて止めた。

『待って待って』

「まだ、何か？」

『せっかく久しぶりの会話なんだから、もうちょっと話してくれてもいいじゃん』

「……僕のことを振った女が何を言う」

『それは……。でも、あたしもナルのこと好きだったよ。でも、ナルを捕まえたくないの』

「言ってることが支離滅裂だ」

『そうかもね。じゃあ、またね』

「ああ」

電話を切って、ナルは溜め息を吐いた。

ナルは、麻衣がイギリスに渡る前に告白をした。だが、今の電話

と同じように断られた。周囲もそのことを知って首を傾げた。

ナルの故郷はイギリスで、今は日本にいてもイギリスに帰るつもりでいることは周知の事実であったし、多少の期間離れ離れになったとしても大して関係はなかったはずだった。

「麻衣はさ、ずっとナルのことが好きだって言ってたんだ。だから、ナルが麻衣に告白したって聞いた時、ようやく二人は付き合うんだって、僕、喜んだんだよね」

「でも、お二人の付き合いは始まらなかった」

「うん。ナルの話だと麻衣に振られたって。好きなのに付き合いえない……。能力者の悩みとか、お互い分かりそうなものだけだね」

「利用されなくなかったんじゃないやありませんこと？」

「真砂子ちゃん。それって、どう言う意味？」

「麻衣は能力者同士の子供として誕生し、多重能力者であるが故に英国心霊調査協会でも極秘扱いだったんでしたわよね。ナルも能力者なら、天才博士と多重能力者の結婚をSPRは邪魔するどころか勧めようとするんじゃないやありませんかしら？」

「なるほど。能力者の子供を作るってことですね。無理矢理結婚させれば、人体実験なんだって言われますが、お互いが好きあって結婚するなら問題ありませんからね」

「うーん。そう言う感じじゃなかったんだよね。ただ、僕の想像なんだけど、麻衣の両親って早くに亡くなっているよね？ 理由は定かじゃないんだけど。そのことも原因なのかなって」

「遺伝性の病気ですか？」

「呪いってのもありえますわね」

若者が三人集まって話し合う一方で、大人達はお酒を酌み交わして話し合いをしていた。

「そう言えば、麻衣から電話が来たんですって？」

「そうみたいです。私は、ちょうど留守にしていたので詳しいことは分かりませんが」

「麻衣は元気でやってんのかな」

「まどかの話では、相変わらずだそうですね。……ただ、しきりに人を避けていると」

「何かあったんですか？」

「いえ、ただ、そんな風に見える時があると。慣れないイギリス生活に疲れているのを見せたくないんじゃないかと言っていました。異国の地の生活は大変ですからね」

「そうどすな。ボクも日本に来たばかりの頃は、文化の違いに慣れませんでした」

「同感ですね」

「せやけど、ジーンさんってすんなりと溶け込んでまりましたよね？」

「ジーンはああ言う性格ですから」

リンの言葉を聞いて、三人は頷いた。

麻衣がイギリスに渡ってから半年。ナルは自分達が二十歳になったのを期にイギリスに戻ることを決意した。まどかからそのことを聞かされた麻衣は、なぜか寂しそうに笑った。

「麻衣ちゃん。嬉しくないの？」

「会えるのは嬉しいですよ。ただ、ナルのことだから、もうちょっと長く向こうにいるかなって思っていました」

「あら。わたしは長くもった方だと思ったわ。だって、お気に入り麻衣ちゃんがいらないんですもの」

「……それで、いつ頃戻って来るんですか？」

「早くても年明けね。引継ぎがあるわけじゃないけど」

ナル、ジーン、リンの三人がイギリスに戻って来ることが決まっても、麻衣は複雑だった。

麻衣には誰にも話したことがない秘密があった。それを知っているのは、麻衣のイギリスの後见人であるジョージと、麻衣の父親の友人であったマーティンだけだった。

麻衣は二十歳まで生きられないと言われたことがある。逆に、二十歳を越すことができれば、百歳まで生きると言われたこともある。

《あーあ。二十歳になったら告白しようって決めてたのに、向こうが先に言うんだもんなあ》

《ナルは事情を知らないからね。……でも、その兆候は現れてないようだね》

《……マーティンさんもごめんなさい。色々と相談に乗ってもらっちゃって》

《気にすることじゃないよ。……私達は本当に、麻衣がナルのお嫁さんになってくれれば嬉しいんだけどね》

《死ぬかもしれないのに結婚なんてできません》
《そう言うところは父親に似ているね》

だが、その年のクリスマスパーティーの最中、麻衣は突然倒れた。麻衣は死ななかった。

「――麻衣？」

低いテノールの声が聞こえた。ひんやりとして、けど少し大きな手が、熱っぽい麻衣には心地よく感じた。

薄っすらと目を開けた麻衣の瞳に漆黒の闇が見えた。

「起きたか？」

「……何で、ナルがいるの？」

ナルは溜め息を吐いた。

「お前はパーティー会場で倒れたんだ。しかも、マーティンはお前の事情を知っていたそうだな」

「マーティンさん、話しちゃったの？」

「無理矢理聞き出した。……麻衣は、自分が死なない限りは連絡するなど言ったらしいな」

「……じゃあ、ナルが何でここにいるの？」

「お前が倒れてから二週間経ってる。……ジーンが新年の挨拶をするためにこっちに電話した時に、お前が倒れたことを聞いたんだ。

……それで、僕だけ先に来た」

「みんなのお別れパーティーから逃げ出したんだ」

「バカ」

ナルは麻衣の頭を軽く小突いた。

「あの連中が早く行けと送り出してくれた。麻衣が死んだら僕のせいだと言われた」

「みんながそんなことを……」

「麻衣。麻衣の残りの人生を僕にくれ」

「は？」

麻衣は一瞬、ナルに何を言われたのか分からなかった。

「麻衣は自分が死ぬかも知れないから、僕の気持ちを受け入れないんだろう？　だったら、麻衣が残り数日の命でも、百歳まで生きても、僕にくれ。髪の毛一本でも、麻衣を手に入りたい」

ナルは麻衣に髪の毛にキスをした。

「……ナルってロマンチストだったんだね」

「そうかもな。……それで、返事は？」

「じゃあ、ナルにあたしの残りの人生をあげる。だから、約束。あたしの二十歳の誕生日にもう一度プロポーズしてね」

だが、麻衣は二十歳を迎えることなく逝った。それは、ナルが麻衣にプロポーズしてからわずか一月後のことだった。

《……ナル》

《今は一人にしておいてくれ……》

ナルは心の中で泣いていた。それは、ジーンだけが知っている。そして、亡くなった麻衣がナルを心配していることも。

『……あんなナルが見たかったわけじゃなかったよ』

「麻衣。ダメだよ。泣いたら」

『死んでもここにいるなんて良くないって分かってる。だけど、ナルのことが心配なの』

「……ねえ、成仏して。悪霊になった麻衣なんて、僕もナルも見たくないよ」

『……ジーンはずっとナルの傍にいてあげてね』

「行くんだね？」

『うん。ジーン。あたしの誕生日になっても、ナルがあたしのこと

を忘れないようだったら伝えて。あたし、きっと生まれ変わってみせるから、あたしのこと捜してって』

「分かった。必ず伝えるよ」

ジーンは自らの意思で成仏する麻衣に手を振った。

数ヶ月後の七月三日。ナルは元通りの生活に戻っていたが、時々、気が抜けたような状態になることがあった。だが、ジーンが麻衣から伝言を伝えると、ナルは苦笑した。

《……ジーン。僕は麻衣の話を信じてみようと思う》

《僕も協力するよ。必ず麻衣を見つけようね》

夢の中で

夢を見た。小さな女の子が、泣いていた。

《どうしたの？》

「……だあれ？」

それは日本語だった。

「僕はジーンだよ。君は？」

「……マイだよ」

僕はその名前を聞いて驚いた。それはかつて、双子の弟が結婚しようとした女性と同じ名前だった。

「マイはどうしてここにいるの？」

それは夢の宇宙だった。

「あたしにも、どうしてここにいるのか分からないの。誰かを捜しているのに見つからないの」

「捜してる？」

「うん。誰なのか分からないけど、あたしはいつも誰かを捜してるの」

「……それって、僕に似ている人？」

僕はこの子が麻衣の生まれ代わりではないかと思った。麻衣の子供の頃を知っているわけではないけれど、魂の色は将に麻衣と同じだった。

「似てるけど……。お兄ちゃんじゃないよ。もっと、黒い人」

その言葉に、僕は笑ってしまった。

「何で笑うの？」

マイは泣きそうな顔をしていた。

「ごめんね。マイを笑ったわけじゃないんだよ。……それよりも、マイはどうしてこんな所にいるの？」

最初に僕は思っていた疑問を聞いた。恐らく五歳前後になるマイがいるような場所じゃなかった。

「……パパとママがりこんするんだって。二人とも、あたしのこと
要らないんだって。あたし、いけない子だから……。あたしがいな
かったら、パパとママはおわかれしないと思ったの」

「まさか……。死のうとしたんじゃないのよね？」

だけど僕の言葉の意味が分からなかったらしく、マイはこてりと
首を傾げた。

「ごめんね。意味がちよっと分からなかったかな……。でもね、僕
はマイと会えて嬉しいよ。それに、僕はマイが捜している人を知っ
ているよ」

「ほんとに？」

「うん。だから、マイは生きて。必ず捜しに行くから。……。ううん。
ナルが君を迎えに行くから待っていて」

僕がそう言っていると、マイは小さく笑った。

それでも彼女を好きになりました（前書き）

「ナルとジーンの状況が逆だったら」のキャラ設定を反映させてお
ります。

それでも彼女を好きになりました

《《お父さん。起きて！》》

双子の息子に起きていきなり上に乗られた。

《二人とも重いよ》

《《お母さんが、起こして来いって言ったの》》

ステレオのように同時に喋る僕の子供達。二人は、僕よりも妻にそっくりだった。僕は息子達を抱き上げて、ダイニングに向かった。ナルの研究のために結婚した妻だったけれど、彼女はクールな性格がナルによく似ていた。日本人だったけれど、両親はアメリカで成功した実業家の娘だった。

邦恵ちゃんに出会ったのは、スポンサーのパーティーのことだった。半分ぐらいナルへのお見合いを兼ねたようなパーティーだった。ナルが婚約中の恋人に死なれたことは、ごく一部の人間しか知らなかった。

《僕は、結婚するつもりはないんですが》

《そんなこと仰らないで》

中にはナルに執拗に迫る女性も何人かいた。そんな中、ナルを追い駆けている女性の一人が、カクテルを飲んでいた女性にぶつかってカクテルを零してしまった。

《ちよっと、そんな所に突っ立ってないでよ》

彼女は、自分がぶつかったことも謝りもしなかった。カクテルを掛けられた女性は、貴族令嬢の頭からカクテルを振りかけた。

《他人にぶつかっても謝りもしない。人が本気で嫌がっているのも気付きもしない。イギリスの上流階級の教育も考えものね》

《何するのよ！》

貴族令嬢は、自分もその女性にカクテルを振り掛けようとした。だけど、その女性にお酒が降り掛かることはなかった。その様子を見ていた僕が止めようとしたのだけど、彼女の背後から何かが現れ

たと思ったら、貴族令嬢が降り掛けようとしたお酒が振り掛けた本人に掛かってしまったからだった。

《何よ！ たかが東洋の島国の小娘じゃない！》

《そう言うあなたは、西洋の島国の小娘だわ。年上に対する礼儀は弁えた方がいいわ。お嬢ちゃん》

彼女はそう言うのと、濡れてしまったドレスを着替えるために会場を後にした。

《ナル。今の誰？》

《さあ》

ナルも、今の出来事にはいささか驚いていた。

後日。まどかの調べで、アメリカを拠点にしている日本人の女性だと言うことが分かった。イギリスの大学に在学中なのだという。

《なあに。ジーンってば彼女のことが気になるの？》

《気になるって言うか、彼女、何だかナルに似ているな〜って思っ
て》

僕のその言葉にナルが不機嫌な顔をした。

《SPRでも話題になってるわ。別名、女性版デイヴィス博士。近
付く男性全てを一言で一刀両断にしているらしいわ》

《SPRの会員なの？》

《SPRと言うよりも、ケンブリッジの学生なのよ》

《でも彼女、特殊な能力者だと思うよ。リンみたいな式神連れてる
みたいだった》

《そんなのがいたのか？　じゃあ、あの時のは彼女の能力じゃな
かったと言うことか》

《ちらっと見たただけからはっきりとしないけど、多分ね》

《……まどか。彼女の名前は？》

《邦恵よ。浅見邦恵》

名前が二つ並んだような名前だと思った。それが最初に彼女の名
前を聞いた時の感想だった。

ナルに頼まれて、とりあえず大学にいる彼女に会いに行くことに

した。そこで僕は見てしまった。彼女が歩く度に、引き寄せられるかのように彼女に集まる浮遊霊の姿を。

《……驚いた。あんなの初めて見た》

結局、その時は話し掛けるタイミングを逃してしまい、僕はナルに怒られてしまった。

《そんなにすごかったんですか？》

《すごいって言うか、不思議な感じ。その辺漂っている浮遊霊が、彼女が来るのを見るなりフラフラうって、引き寄せられて行くんだ》
《そうなんですか……》

リンに話すと、さすがのリンでも驚いていた。霊視ができる人間なら、彼女の体質に驚かない人間はいないだろう。何がすごいって、勝手に浮遊霊が寄って来る上に、彼女の危険から、その浮遊霊達が守ってくれると言うことだった。

霊視出来る人間と自分で考えていて、僕は不意に日本にいるメンバーを思い出した。僕達の帰国後に滝川さんと綾子さんが結婚したと聞いた。男の子が一人いるらしい。安原さんと真砂子ちゃんもいい感じだったなあ。

僕もいつか結婚するんだろうな、なんてちよっと思った。

結局邦恵ちゃんには、会いに行くことはなかった。

次に会ったのはそれから一年も経った時だった。僕は普通に道を歩いているだけだった。その時、壁の向こうから声が聞こえた。

《そんな所、飛び越えるの！ 危ないわ！》

《大丈夫》

生徒のエスケープかなと、僕は思った。イギリスでも日本でも、僕は何度か授業をサボったことがあった。そんなことを思い出してその場を通り過ぎようとした時、僕の頭上に人が振って来た。

「いったゝ。何で、こんなところで立ち止まってるのよ……」

驚いたことに、それが邦恵ちゃんだった。

《……ごめんなさい。確認しなかった私の不注意でした》

彼女は見事なまでに僕の上に乗っかっていた。次に彼女の友人ら

しき人物が、僕を見て叫んだ。

《きゃあー！ デイヴィス博士！》

ナルと間違えられることなんて日常茶飯事だった。だけど、ナルの名前を聞いて邦恵ちゃんは、何だかすごく嫌そうな顔をしていた。《とりあえずさ、上から降りてくれないかな》

僕がそう言うと、彼女は退いてくれた。

《デイヴィス博士。私、あなたのファンなんです！》

友人の女の子がそう言ってきた。

《期待させてごめんね。僕、ナルの兄の方なんだよ》

《だって。残念だったわね》

邦恵ちゃんはナルじゃないと分かると、ちょっと安心したみたいだった。それから、僕に付いた砂埃を払ってくれた。

《改めてごめんなさい。あなたがデイヴィス博士じゃなくて安心したわ》

《ナルだったらどうだったの？》

《……謝ったことを後悔する？ 違うかな。……そもそもぶつかったら、今日一日気になってたと思う。あんなのにぶつかったって》ナルをあんなの呼ばわりした彼女を、少し気にするようになった。その頃には、ナルのついでに、僕にも見合い話が来るようになった。ナルが亡くした婚約者を思い出して結婚する様子がないのであれば、ってことらしい。

自慢じゃないが、子供の頃はナルよりもてた。ナルは、博士と言う立場や才能があるためにナルへの見合い話は多い。そんな中、見合い写真の一つに邦恵ちゃんを発見した。

《これは……》

《どうした？ ジーン》

《彼女だよ。ほら、一年前のパーティの時の子》

僕の言葉に、ナルはようやく思い出したらしい。

僕はナルのためになるならと考えて、スポンサーの娘と結婚することに決めた。それに、邦恵ちゃんが何となく気になっていたのは

本当だった。

邦恵ちゃんは、僕が見合いをOKしたことを複雑そうに見ていた。
《もしかして、親に勝手に見合いさせられた口かな?》

《ええ。それに、上に落ちたことに対する嫌がらせかと思ったの》

《随分とはつきり言うね。でも、嫌がらせで結婚なんて考えないよ》
《じゃあ、何で?》

《一年前。君は、僕の弟を助けてくれただろう。パーティ会場で》
《あれは、あの女がムカついたから……》

《それからしばらくして、構内で君を見掛けた。そして、君に浮遊
霊が引き寄せられるのを見たんだ。あんなのを見たのは、僕は初め
てだった》

《そう言えば、デイヴィス博士のお兄さんって霊媒師だったっけ》
それから少し、彼女のことを聞いた。赤ん坊の時に両親を亡くし、
現在の親は伯父夫婦だとか。高校生の時は日本で一人暮らしをして
いたのだとか。

そのことを聞いて、自分も以前、日本の高校に通っていたことを
明かした。

《そうなんだ。……じゃあ、東京のどこかですれ違っていたのかも
ね》

それから僕は、邦恵ちゃんと結婚した。

彼女はまだ、大学に在学中だったけれど、のっぴきならない事情
ができてしまったためだった。

そんな彼女と結婚して三年。僕は息子達に起こされる毎日になっ
ていた。

いざ日本へ

僕が夢で麻衣によく似た少女に出会ってから十年以上の月日が過ぎた。ナルはその間、かなり強引に近い結婚を一度したけど、わずか一年も経たない内に離婚してしまった以外、ほとんど昔と変わらない生活をしていた。

そんなナルに日本の大学から講師の話が来た。

《へえ。日本の大学の》

《超心理学を教えているらしいな》

《日本か……。最後にぼーさん達に会ったのっていつだっけ?》

《さあ》

《どっちにしろ随分会ってないんだよね》

《そうだな……》

ナルは今でも、麻衣を忘れていない。それは、双子の僕でなくても分かりすぎるほど分かる。僕としては、ナルに麻衣の生まれ変わりがかもしれないあの子を捜しに行かせたい。

《——って思ってるんだけど、邦恵ちゃんはどう思う?》

《私に聞くことじゃないと思うけど》

《それでもさ……》

《ジーンの中で答えは出てるんでしょ。それに最近のデイヴィス博士は働きすぎだって、まどかさんも言ってたしね。都合よく日本から客員教授の話も来ているんでしょ。追い出せばいいじゃない。麻衣さんを追い駆けている限り、デイヴィス博士はずっとあの状態よ》

相変わらず辛辣な言葉。僕の好みのタイプでもしかしてナルなのかもしれないと、邦恵ちゃんを見ていると、ちょっと思ってしまう。

僕はその話をマーティンやルエラ、まどかやリンにも相談した。

《邦恵ちゃんがそんなことを?》

《うん》

《……ナルに似てるとは思ってたけど、性格はナルよりも上かもしれないわね》

《ですが、一応ナルのことを考えて言われたのかもしれませんが》
《リンもそう思う？　でも、邦恵ちゃんって昔からなぜか、ナルと一緒にされるのすごく嫌がるんだよね。昔一度だけ、ナルが女性同伴のパーティーに出席しなきゃならない時があったけど……》

二人は一言も喋らなかったらしい。

僕と結婚する前に、女性版デイヴィス博士と呼ばれていたのを気にしているのかと思ったけど、そう言うわけでもないようだった。
《まあ、それはともかく。ジーンはナルのことを考えて、ナルに日本に行って欲しいんだな？》

《ナルは今でも麻衣を想ってる。僕ははっきりと麻衣が生まれ変わってみせると言ったのを聞いているし、十年前に夢の中だけど、麻衣によく似た女の子に会ってる。運命と言うものが存在するなら、今回の話はいい機会だと思うんだ》

《そうね。それに、仕事ばかりしているナルにはリフレッシュも必要だわ。向こうには、昔お世話になった方々もいることだしね》

マーティンとルエラの言葉を聞いて、まどかは溜め息を吐いた。
《なら、わたしはナルが日本に行くように手を回せばいいのね》
《ごめんね。まどか》

《謝らないでちょうだい。わたしだって、ナルのことは心配してるのよ。……ただ、それ以上に心配なこともあるけど》

まどかは何かを言い掛けたけれど、結局は教えてくれなかった。それからしばらくして、ナルは少し複雑そうな顔で日本に向かった。日本の大学で一年間客員教授をするナルのことを、日本にいるぼーさん達にも知らせた。

彼もお父さんになりました

俺がまだ若かった頃、とある高校に霊が出るという依頼を受けた仕事先で、黒い服を着た顔立ちのやたらとキレイな少年と、蜜茶の髪と瞳が特徴的な女子高生に出会った。

現在の伴侶となった綾子に出会ったのも、ちょうどその時だった。

「ねえ、本当に博士に会えるの？」

「ジーンの話じゃそう言ってたけどな」

イギリスに帰国したナルが、十六年ぶりに日本に来ると言う知らせをくれたのは、ナルの双子の兄であるジーンだった。

ナルこと、オリヴァー・デイヴィスは、俺の尊敬する博士だ。英国心霊調査協会所属の超心理学者で、かつて東京渋谷に存在した渋谷サイキック・リサーチの所長だった。

一人息子を連れて、空港にナルを迎えに行くと、彼は相変わらず黒い服を纏っていた。

「よう、ナルちゃん」

「……ぼーさん。……ジーンが知らせたのか」

「ご名答。以前会ったことがあったよな。息子の真だ」

「ああ」

「大きくなっただろ。来年高校生になる」

「ぼーさんも年を取ったな」

「ほっとけ。そう言や、ジーンの所の双子も随分大きくなったんだろ？ 幾つになる？」

「幾つ……だったかな」

「一応、甥っ子だろ」

「甥には違いないが、そんなこと気にならないので」

俺は、ナルの荷物を持つと車まで運んだ。

「それにしても、ナルがよく、大学の客員教授なんか引き受けたな」

「……ジーン達に少し休めと言われて追い出された」

ジーンから大体の話は聞いていた。

「今日はとりあえずホテルに泊まるんだろ？　それとも家に来るか？」

「いや。松崎さんにも迷惑だろう」

ナルは結婚後も、綾子を「松崎さん」、真砂子を「原さん」と旧姓で呼ぶ。そう言えば以前、ジーンの奥さんを紹介された時も名字で呼んでいた。ナルにとって名前で呼ぶ同世代の女性は麻衣だけなのかもしれない。

「安原達も会いたがってたから、顔出してやれよ」

「ああ」

ナルをホテルまで送り届けると、俺は息子と共に帰宅した。

「ナルってば相変わらずなのね」

「やっぱ、麻衣がいけないのが原因なのかもな」

「もっと早く想いが通じてたら、今頃麻衣の忘れ形見でもいたのかしらね」

「そりゃ分かんけど、ジーンの話じゃ、麻衣の生まれ変わりが日本にいる可能性があるらしい」

俺がそう言っていると、綾子が怪訝な顔をした。それはそうだ。生まれ変わり云々よりも、麻衣が死んでから十六年。本当に生まれ変わっているとしたら、どんなに若くても高校生と言うことだ。

「……ナルが犯罪者にならなきゃいいけどね」

「森女史に言われて知ったらしいが、ジーンもそのことに気を付けてくれと言っていた。それに、麻衣の生まれ変わりがどう言う子か、分からないしな」

後日、弁護士になっていた安原と真砂子の夫婦にも、ナルが日本に来たことを知らせた。

「ナルは、相変わらずなんですの？」

「さすがに十六年前よりは年食ったけどな。一応、ここの住所教えただけどな、あいつのことだから、よほどのことがない限りは訪ねるなんてしねえだろうな」

「渋谷さんらしいですね」

ともかく、これから一年の間に何があるのか、俺には予測もつかないだろう。

舞との出会い

日本の大学に客員教授として呼ばれてから数ヶ月。日増しに暑くなる日本の夏に辟易していた。

（これだから日本の夏は苦手なんだ）

昔、そんな風に文句を言うと、麻衣は決まって新陳代謝がないからだと言っていた。

その麻衣を結婚成立前に亡くしてから十六年。一度は結婚したものの、僕は今でも麻衣を捜しているような気持ちでいた。

十六年前よりも温暖化の影響で気温の上昇した東京で、僕は意識を失った。

人が倒れても、周囲の人間は見向きもしないだろう。

「おじさん。ちょっと、大丈夫？」

耳元で声がした。頬を伝う水滴は汗ではないようだ。温くはなっていたが、どうやら濡らしたハンカチを乗せられていたようだ。

「あ、目が覚めた」

どうやらソファの上に寝かされているらしい。

「おじさん、店の前で倒れたんだよ。とりあえず、店の中で休ませただけだ」

「……ここは？」

「カラオケボックスだよ。この暑さだもんね。サラリーマンなんかも、時々休むだけで利用したりするんだよ」

「そうか……」

僕はとりあえず体を起こした。僕を介抱してくれたと言うバイト店員は、どうやら若い女性のようにだった。

「迷惑を掛けたな。この部屋の使用料を払おう」

「そんな、いいですよ。それよりも、今度はお客さんとして来て下さった方がありがたいです。これ、サービス券です」

店長はそう言いながら、薄っぺらいチケットを寄越した。

僕は、ぼーさん辺りにでもくれてやろうと考えて、とりあえずそのカラオケ屋を後にした。

そう言えば、今日は講義はなかったが、日本の高校辺りは休みではなかったはずだが。と、不意に思った。それにあの少女は、バイト先の制服らしい帽子を目深に被っていた。

学校はどうしたのか、と、咎められるのを気にしていたのだろうと考えた。

ぼーさんにカラオケ屋のサービス券を渡すと、安原さんと共に無理やり二、三回連れて行かれたが、彼女に会うことはなかった。バイトの時間ではなかったのだろう。

それからしばらくして、八月の終わり。仕事で遅くなった僕は、夜道を急いでいた。

「ちよっと、やめてよ！」

「そんなこと言わないでさ」

「店長。離して下さい」

言い争っているような声が聞こえた。それは、あのカラオケ屋の店長だった。相手の方は陰になって見えない。だが、彼女は僕の存在に気付くと、僕の方に駆け寄って来た。

「助けて下さい！」

イキナリ腕を掴まれた。本当に困っているのだと言う感情が流れ込んで来た。

「何だ、お前は」

「嫌がる女性に対してする態度ではありませんね。あなたも大人なら、立場を弁えられた方がいい」

「高校にも行ってないこの女を雇ってやったんだ。そのぐらいの見返りは必要だろ」

「だが、付き合いを強要することはできないはずだ」

僕がそう言うと、店長は少女にクビを言い渡して帰って行った。どうやら、あの店長の家に居候していたらしい。

改めて彼女を見て、僕は驚いた。

麻衣に似ている。と、思った。

「……一緒に来るか？」

「……いいの？」

「乗り掛かった船だ。僕のせいで仕事も住む所もなくしたみたいだからな」

「ありがとう」

笑うと、益々麻衣に似ていた。

「あの男は恋人だったのか？」

「まさかー。中学の時に母親が男作って逃げてさ、高校に入れなかったんだよね。困って路上に蹲っていた時に、おじさんみたいに「家に来るか」って言われてさ。カラオケボックスを経営してたからバイトもさせてくれたの。ところで、おじさんの名前は？」

「渋谷一也」

「ふーん。あたしは、舞。大野舞って言うんだ」

「まい……」

「あ、ちょっと似合わなかった？ でも、これが生まれた時からの名前だから。……ちょっと違うか。生まれた時は父さんも母さんもいたから」

「さっき母親が男を作って逃げたと言ったな。父親はどうした？」

「あたしの両親、小さい時に離婚したんだ。原因はあたしのせい」

舞は、そう言うのと僕の腕を離して立ち止まった。

「遅くなるぞ」

「……おじさんは、超能力とか信じる？」

「信じないが」

「ほんとに？」

僕の言葉に舞は安堵の表情を浮かべた。

「僕は、超心理学を大学で教えている」

「ちょう……心理学？」

「超心理学。君が今言った超能力なんかの類だ。心霊が基本的な研究分野だが、サイキックなどのサイ能力も研究対象の一つだ」

「じゃあ、超能力の専門家ってことなんだ」

「まあ、そうだな。下手なインチキよりは詳しいな」

舞はまだ少し疑り深そうだったが、とりあえず僕の被験者と言う形で同居することになった。

身代わりにはできない★

舞と同居を始めてから二ヶ月。季節は秋になっていた。

「ねえ、先生。先生はどうして、あたしのことを拾ってくれたの？」

「知りたいか？」

「能力のことを言う前だから、気になってたんだ」

「……正直に言おうと、舞が亡くなった僕の恋人にそっくりだったからだ」

「恋人？」

「そう。舞と同じ名前だった。日本人で、結婚が成立する直前に亡くなった。初めて出会ったのも、ちょうど今の舞と同じくらいだった」

「……そうなんだ。その人のこと好きだったんだね」

「忘れられないのは事実だな。彼女は必ず生まれ変わると言った。だから、僕は彼女が生まれ変わるのを信じた」

「じゃあ、あたしが生まれ変わりがも知れないってこと？」

「彼女は、稀有な能力者だった」

「けう？」

「滅多にない、珍しいと言う意味だ。多重能力者で、小学校に上がる前にはすでに両親がいなかった。最初の頃なんか、廃ビルで寝泊りしながら学校に通っていたな」

そのことには、さすがに驚いていた。

「先生は、イギリス人なんだよね？　いつか、帰っちゃうんだよね」

「日本の滞在期間は一年だからな。三月になれば日本を発つ」

「……あと五ヶ月もないんだね」

「一緒に来るか？　どうせ、父親も母親もいても居なくても同じだろう」

「いいの？　あたしバカだから迷惑掛けちゃうかもしれないよ」

「学校行ってなかったぐらい、後でどうにでもなる。それと、僕

のことを先生ではなく、ナルと呼べ」

「ナル？」

「僕の愛称。僕と親しい人間の多くが僕をそう呼ぶ」

「ふーん」

僕は片手で舞を引き寄せた。彼女と目と目が合い、舞は目を瞑ると僕の唇にキスを落とした。

「お礼のキスだよ。亡くなった恋人に悪いかな」

「いや。彼女とは一度もキスしたことがなかったからな。だから、僕のファーストキスを奪ったのは舞になるな」

「え！ そうなの？ その歳でファーストキスもまだなんだ！ っ
てことは、エッチもしたことないんだ」

「まあ、そうだな。だが、知識だけはある」

僕は向きを変えて、舞にキスをした。麻衣の代わりにするのは、彼女に悪いと思ったけれど、一番最初だけは麻衣を思っ
て抱こうと考えた。

一枚ずつ服を剥ぎ取り、舞の華奢な体が現れた。

「何だか、恥ずかしい」

「少し痛いかもしれないが、我慢できるか？」

「する」

その言葉に僕は内心笑った。

舞の股間の指を這わせ、少しずつ乾いた音から、次第にグチュグチュと濡れた音に変わっていく。小さな少女は、僕の己自身を間近に見て驚嘆していた。

「こ、こんなのが入るの？」

「同じ場所から赤ん坊が出て来るんだ。そう考えれば大きくはない」
「それは、そうかもしれないけど……」

「痛くても我慢するんだろ」

僕は舞にキスを一つ落としてから、舞の足を左右に広げると、濡れきった彼女の股間に己自身をゆっくりと挿入した。

「あ……痛っ」

逃れようとする舞を抱き寄せて、僕はさらに侵入した。ガクガクと痙攣した後、舞は気を失った。

一度目は麻衣を想って抱こうと考えていたが、やはり、目の前にいるのは麻衣ではなく舞だ。生まれ変わりかもしれないけれども生まれ方も育ち方も違う。

二十も年下の少女に対してこんなことができるとは、自分でも思えなかった。

「……何だか変な感じ。ナルは、あの店長よりも年上なのに、ちっとも嫌な感じがしなかった」

「それは、僕の方が美形だからだろう」

「でも、中年だよな」

「まあな。……僕のこととは、以前話したな」

「うん」

「僕は子供の頃から人に触れるのも、触れられるのも苦手だった。その数少ない例外が双子の兄と亡くなった麻衣だった。だから、舞はもう一人の例外だ。そして、今は一番近くにいる」

「あたし、ナルの愛人じゃなくて、恋人だと思ってもいいのかな」

「僕は独身だ。一度は結婚したが、すでに離婚している。……自信を持っていい。舞は超心理学者、オリヴァー・デイヴィスの恋人だと」

「嬉しい！」

それから僕は、弁護士の安原さんに頼んで舞の保護者を捜してもらった。

「見つかりましたよ。住所はこちらです」

「ありがとうございます」

「それにしても驚きですね。渋谷さんがまさか、十六歳の女の子と結婚するつもりだとは思いませんでした。やはり、谷山さんの生まれ変わり説を信じていらっしゃるんですか？」

「最初はそう思っていました。今は違います。ようは、彼女を抱くことができたと言うことですよ」

僕の言葉に安原さんは苦笑していた。

麻衣は孤児だったから親の承諾は必要なかったが、離婚して育児放棄しているとは言え、舞の両親は一応生きていた。日本では、未成年と結婚するには親の承諾がいる。

僕は、彼女の両親をそれぞれ捜し出し、結婚承諾書にサインさせた。元々、彼女の能力を恐れて捨てた親だ。厄介払いできるのならありがたいと思っているようだった。

「……結婚までしてくれるとは思わなかった」

「イギリスに行っても、ちゃんと立場がないと不安になるだろう？」

「まあ、そうだね。だけど、一人にされたら不安になるかも」

「僕の助手として手伝ってもらってから心配ない。だが……」

「だが？」

「浮気は許さないからな」

僕は第二の人生によく舞を手に入れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0059v/>

悪魔と呼ばれた少女

2011年8月10日03時26分発行